

印欧語史的形態論研究

——シグマによる動詞形成——

吉 田 和 彦

0. 序
1. *-s-* をもつ未来語幹と願望形 (desiderative) 語幹
 - 1.1. ギリシア語の *s-*未来形
 - 1.2. インド・イラン語派の *s-*願望形と古期アイルランド語の重複 (reduplication) をもつ *s-*未来形, *a-*未来形, *ē-*未来形
 - 1.3. インド・イラン語派とバルト・スラヴ語派の未来分詞
 - 1.4. リトアニア語, オスク語, ウムブリア語, 初期ラテン語の *s-*未来形, 及び古期アイルランド語の重複をもたない *s-*未来形
 - 1.5. 要約
2. *s-*アオリストと *s-*接続法
 - 2.1. ヴェーダ
 - 2.2. ギリシア語
 - 2.3. 古期アイルランド語
 - 2.4. 要約
3. *s-*アオリストの先史
 - 3.1. ヒッタイト語 *hi-*動詞の過去形
 - 3.2. トカラ語 A, B の過去第 3 類
 - 3.3. トカラ語 A, B, サンスクリット語, ラテン語, 古代教会スラヴ語の *s-*アオリストを特徴づける延張階梯
 - 3.4. **o~*e* アプラウトを示すトカラ語 A, B の現在第 8 類と過去第 3 類, 及びヒッタイト語の *hi-*動詞
 - 3.5. 印欧語名詞にみられる内派生 (internal derivation)
 - 3.6. *h₂e-*動詞と *-s-*
 - 3.7. 要約
4. *s-*未来, *s-*願望法, *s-*接続法, 及び *s-*アオリストの間の歴史的関係 (注)

0. 印欧語族に属する分派諸言語を見渡す時、*-s-* によって様々な動詞語幹を形成する方法が非常に顕著であることに気付く¹⁾。この *-s-* による動詞形成法は、*s-*未来、*s-*願望法 (*s-desiderative*)、*s-*アオリスト、及び *s-*接続法（一般には、*s-*アオリストの接続法と言われる）という4つのカテゴリーにおいて用いられる。さらに、各々の動詞カテゴリーにおいて、*-s-*によって特徴づけられる語幹のタイプは決して一様ではない。例えば、*s-*未来をとりあげれば、*athematic* のタイプ (e.g. オスク語及びウムブリア語 *fust* “he will be”), *thematic* のタイプ (e.g. ギリシア語 *δώσω* “I will give”²⁾), 重複 (*reduplication*) を伴うタイプ (e.g. 古期アイルランド語 *gigis* “he will pray”), *-ie/o-* によって拡張されるタイプ (e.g. サンスクリット語 *dāsyāti* “he will give”) など、多様な形成法が存在する。以下に、*s-*を持つ種々の生産的な動詞語幹及びそれらと関連する形式を、各語派または主要言語別にあげる。

- (1) インド・イラン語派 —— *sya-*未来, *sa-*願望法, *s-*アオリスト, *iṣ-*アオリスト, *siṣ-*アオリスト, *sa-*アオリスト, *s-*接続法
- (2) ギリシア語 —— *s-*未来, Attic 未来, Doric 未来, *s-*アオリスト, *s-*接続法
- (3) ラテン語 —— (初期ラテン語の) *s-*未来 (一般に *future perfect* と呼ばれる), *-s-*を持つ完了形
- (4) オスク・ウムブリア語派 —— *s-*未来
- (5) 古期アイルランド語 —— 重複を持つ *s-*未来, 重複を持たない *s-*未来, *a-*未来, *ē-*未来, *s-*過去, *t-*過去, *s-*接続法
- (6) 古代教会スラヴ語 —— *s-*アオリスト
- (7) リトアニア語 —— *s-*未来
- (8) トカラ語 A, B —— 現在第8類³⁾

ヒッタイト語とトカラ語 A, B では、他の諸言語の *s-*アオリストに対応する形式は、動詞活用において極く偏った分布しか示さない。また、ゲルマン語派においては、*-s-* によって形成される動詞語幹はすべて失われている。

ヒッタイト語とトカラ語 A, B の解説、そして喉音理論 (*laryngeal theory*) の到来以前には、印欧語学者たちは、動詞のあるカテゴリーを他のカテゴリーと互いに関連させて、動詞体系全体を把えるといったことは全くできず、各カテゴリーをアトミスティックに独立させて分析していた。ところが、印欧祖語

の動詞体系についての我々の理解は近年飛躍的に深まり、従来別個に扱われていた完了、中動態及び thematic の能動態が、本来、共通の源に遡るのではないかというひとつの見解が提出された⁴⁾。この見方の是非はさておき、重要なのはその研究方法である。つまり、特定の言語における未解決の問題を、その言語内部の狭い視野で議論するのではなく、印欧語比較文法の可能な限り広いパースペクティブに立って、互いに関連すると考えられるいくつかのカテゴリーを有機的に把握しようとする態度である。

うえであげた諸言語の *-s-* を持つ様々な形式が、各カテゴリー内でどのような関係にあったのか、また、*s-*未来、*s-*願望法、*s-*アオリスト、*s-*接続法の4つのカテゴリーが、歴史的にどのように結びついていたのかを、比較研究によって探求するのが本稿のねらいである。この問題の解明に向けても、ヒッタイト語とトカラ語 A, B の果たす役割は非常に大きい。新しい言語事実の発見とその解釈が、従来十分に理解されていなかった個々の問題に光を当て、それらを統一的に説明する道を開く可能性があるからである。問題の解決の鍵を握るヒッタイト語とトカラ語の重要な形式を議論する前に、まず *s-*未来、*s-*願望法、*s-*アオリスト、*s-*接続法のいずれかを、生産的なカテゴリーとして持つ他の諸言語の分析から始めたい⁵⁾。

1. 祖語において未来形が確立した範疇として存在したかどうかは、一般に疑わしいとされ、未来の概念は類似した意味を持つ接続法によって主として表現されていたと通常考えられている。このことは、ギリシア語やラテン語の一部の動詞の未来形に接続法の名残りがあることから窺われる。例えば、ギリシア語の *-s-* のない未来形 *ἔδομαι* “I will eat” や *πτόμαι* “I will drink” においては、語根 $*(h_1)ed-$ 、 $*pih_3-$ が接続法を特徴づける接辞 *-e/o-* によって拡張されている。これに対して、現在形は *-e/o-* のない *ἔσθτω* “I eat”, *πίνω* “I drink” を持つ⁶⁾。また、ラテン語の不規則動詞 *sum* “I am” の未来、1 sg. *erō*, 2 sg. *eris*, 3 sg. *erit*, etc. も同様に、古くは *-e/o-* による接続法であった (1 sg. $*(h_1)es-o-h_2$, 2 sg. $*(h_1)es-e-s(i)$, 3 sg. $*(h_1)es-e-t(i)$)。しかしながら、多くの印欧諸語で *-s-* を持つ未来形が使われており、これらが各分派諸言語における個別的で並行的な発展とは考え難いため、遅くとも共通基語時代の末期には *s-*未来が誕生していたと考えられる。また、*s-*願望法はインド・イラン語派に

しかみられないが、あとで示すように、形態的にも意味的にも、*s*-未来のひとつのタイプと細部において一致するので、*s*-未来と合わせて考察すると理解しやすい。この *s*-未来と *s*-願望法は、語幹形成の観点から大きく4つのタイプに分類することが可能である。以下、1.1.~1.4.において各々のタイプの分析を試みる。

1.1. ギリシア語の *s*-未来は、語幹を **-se/o-* によって拡張し、現在形と同じ語尾を付与することによって造られる。

fut. sg. 1 γράψω < **graph-so-h₂* “I will write”

2 γράφεις < **graph-se-si*

3 γράφει < **graph-se-i*

pres. sg. 1 γράφω < **graph-o-h₂* “I write”

2 γράφεις < **graph-e-si*

3 γράφει < **graph-e-i* (または *-e-ti*⁸⁾)

ギリシア語では、*s* は母音間で *h* になった後、消失するために、語根が母音で終わる動詞の未来形は、一度 *s* を失ってから、語根が子音で終わる動詞（上の γράψω のタイプ）の類推によって、*s* を回復した。例えば、λύσω “I will loose” < **luō* < **luhō* < **lusō*。以上から、ギリシア語の未来形は現在語幹から *-se/o-* によって規則的に派生されるように見えるが、決してそうではなく、以下の動詞はギリシア語の *s*-未来の興味深い特異性を教えてくれる。

例えば、重複を持つ現在形として、δίδωμι “I give”, 3 sg. δίδωσι < **-τι* (cf. ドーリス方言 δίδωτι), ἵστημι “I (cause to) stand” (cf. ドーリス方言 ἵσταμι) がある。これらの動詞の未来形は、各々 δώσω “I will give” < **deh₃-se/o-*, στήσομαι “I will stand (中動態)” < **steh₂-se/o-* の如く、*-se/o-* が付与される点では規則的であるが、重複を失っている。

また、πάσχω “I suffer” < **pnth-ske/o-* は、現在形が零階梯を示すのに対して、その *s*-未来形 πείσομαι (中動態) < **pnth-se/o-* は *e*-階梯を持つ。πείσομαι の *ει* は、いわゆる spurious diphthong (擬二重母音) で、代償延張によって生じ、音価は [ē] である。一方、完了形 πέπονθα < **pe-ponth-h₂e* は *o*-階梯を持つ。また、χαράνω “I hold” に関しても、この現在形は、零階梯の **ghnd-n-e/o-* > **χαδανω* が完了形 κέχονθα < **ghe-ghond-h₂e* の *νθ* を類推的に得た形

として理解されるが、その未来形 $\chi\epsilon\iota\sigma\omicron\mu\alpha\iota < *ghend-se/o-$ は e -階梯を示す。うえにあげた $\delta\acute{o}\sigma\omega, \sigma\tau\eta\sigma\omicron\mu\alpha\iota$ も同じく e -階梯を持つことから、ギリシア語の s -未来は、本来、重複を伴わない e -階梯の語根が $-se/o-$ によって拡張された thematic のタイプであったと言えるだろう。そして、 e -階梯を示さない未来形は、未来形以外の語幹からの影響を受けた二次的な形式と考えられる。

さらに、ギリシア語の s -未来は、いくつかの動詞において中動態のみにあらわれ、対応する能動態を欠くという特徴を持つ。例えば、既に示した $\sigma\tau\eta\sigma\omicron\mu\alpha\iota, \pi\epsilon\iota\sigma\omicron\mu\alpha\iota, \chi\epsilon\iota\sigma\omicron\mu\alpha\iota$ に加えて、 $\xi\sigma\omicron\mu\alpha\iota$ “I will be” $< *(h_1)es-se/o-$, $\theta\rho\acute{\epsilon}\xi\omicron\mu\alpha\iota$ “I will run” $< *threkh-se/o-$ などがある。現在形は、各々 $\acute{\epsilon}\mu\acute{\iota}, \tau\rho\acute{\epsilon}\chi\omega$ である。この事実から、ギリシア語の s -未来は、本来、中動態の未来を形成するのに生産的に用いられたタイプが能動態にも広がったものと推定できるかもしれない。この考えは、ギリシア語の未来完了が、 $\acute{\epsilon}\sigma\tau\eta\kappa\alpha$ “I have stood” や $\tau\acute{\epsilon}\theta\eta\eta\kappa\alpha$ “I am dead” のような現在の意味を獲得した現在完了形から造られる $\acute{\epsilon}\sigma\tau\eta\acute{\xi}\omega$ や $\tau\epsilon\theta\eta\eta\acute{\xi}\omega$ を除いては、専ら、 $\lambda\epsilon\lambda\acute{\epsilon}\iota\phi\epsilon\tau\alpha\iota$ “he will have been left” のように（現在完了は $\lambda\acute{\epsilon}\lambda\omicron\iota\pi\epsilon$ ）、中動態のみにあらわれるということによって支持されるであろう。

これまでに考察した例では、未来形成に用いられる接辞はすべて $-σε/o-$ と考えて、問題はなかった。ところが、一般にアッティカ式未来 (Attic future) 及びドーリス式未来 (Doric future) として知られる形式の場合は、事情が異なってくる。アッティカ式未来は、共時的にみた場合、語根の末尾に ϵ が現われ、それが後続する母音と融合 (contraction) したものとして説明される。例えば、現在形 $\tau\acute{\epsilon}\iota\omega$ “I stretch” $< *τεν-ω$ に対して、その未来形 $\tau\epsilon\upsilon\acute{\omega}$ は $*τεν\acute{\epsilon}\omega$ に遡ると考えられる。また、 $\alpha\pi\omicron\theta\upsilon\eta\acute{\sigma}\kappa\omega$ “I die” の場合も、その未来形 $-\theta\alpha\upsilon\omicron\delta\mu\alpha\iota$ は $*-\theta\alpha\upsilon\acute{\epsilon}\omicron\mu\alpha\iota$ から母音融合によって生じた。歴史的には、母音融合は ϵ に続く $-σε/o-$ の σ が消失したことにより生じたのであり、先にあげた $\lambda\acute{\upsilon}\sigma\omega$ の場合と異なり、アッティカ式未来においては、母音間の σ は類推によって回復されなかった。ホーマーでは、 $\mu\epsilon\upsilon\acute{\epsilon}\omega$ “I will stay” $< *mene-se/o-$ (アッティカ方言 $\mu\epsilon\upsilon\acute{\omega}$) のように、融合していない形がまだ残っていることがある。

この $-σε/o-$ の前にあらわれる ϵ の起源に関して、Schwyzer や Buck は、 ϵ は本来いくつかの二音節語基に属するもので、そこから他の動詞に広がった、と述べている。¹⁰⁾ しかしながら、 ϵ は特定の環境であらわれる。すなわち、語根

がソナントで終わる動詞にのみ ε があらわれ、Schwyzer や Buck の考えでは、この限られた ε の分布を説明することができない。また、H. Rix は、 $\delta\lambda\omega$ “I will destroy” $\leftarrow *o\lambda\varepsilon\text{-}\sigma\varepsilon/o\text{-} \leftarrow *h_3el\bar{h}_1\text{-}se/o\text{-}$ のように、語根の末尾の h_1 が母音化して ε となり、それが一般に広がったと提案している。¹¹⁾しかし、 h_1 で終わる語根は非常に限られている ($\acute{\epsilon}\rho\omega$ “I will say” $\leftarrow *uere\text{-}se/o\text{-} \leftarrow *uer\bar{h}_1\text{-}se/o\text{-}$, $\tau\epsilon\mu\omega$ “I will cut” $\leftarrow *teme\text{-}se/o\text{-} \leftarrow *tem\bar{h}_1\text{-}se/o\text{-}$ などごく僅か)。もうひとつの反対理由としては、同じ環境で h_1 があらわれる s -アオリストでは、この種の ε は決して広く使われない。¹²⁾さらに、Schwyzer と Buck と同様に、 ε がソナントの後でのみ生起するという分布の特異性が説明できない。

$-\varepsilon\text{-}\sigma\varepsilon/o\text{-}$ と $-\sigma\varepsilon/o\text{-}$ の分布に全く並行した現象は、他の諸言語にも見いだされる。例えば、サンスクリット語の未来形においては、 $d\acute{a}s\bar{y}ati$ “he will give” (\leftarrow 語根 $d\acute{a}$ -), $yak\bar{s}yati$ “he will pray” ($\leftarrow yaj$ -), $kari\bar{s}yati$ “he will make” ($\leftarrow k\bar{r}$ -) から明らかのように、ソナントの後では $-i\bar{s}ya\text{-}$, それ以外の環境では $-sya\text{-}$ が未来形の接辞としてあらわれる。サンスクリット語では母音化した喉音 (h_1, h_2, h_3) はすべて i となり、ギリシア語では $h_1 > \varepsilon$, $h_2 > \alpha$, $h_3 > o$ となるので、巨視的な観点から、ギリシア語の形式をサンスクリット語と並行的に解釈するならば、ギリシア語の s -未来の接辞は次の形態音素的交替を示すといえよう。

$-h_1se/o\text{-}$ / ソナント _____

$-se/o\text{-}$ / それ以外の環境

西ギリシア方言では、 $-\sigma\epsilon\omega$ に終わる一般にドーリス式未来 (Doric future) と呼ばれる形式が普通に用いられる。これは、 $\kappa\lambda\epsilon\phi\acute{\epsilon}\omega > \kappa\lambda\epsilon\phi\omega$ “I will steal” や $\gamma\rho\alpha\phi\acute{\epsilon}\omega > \gamma\rho\alpha\phi\omega$ “I will write” から推定できるように、 $\tau\epsilon\nu\acute{\epsilon}\omega > \tau\epsilon\nu\omega$ のタイプのアッティカ式未来と $\gamma\rho\acute{\alpha}\phi\omega$ のタイプの s -未来との混成である。つまり、本来環境によって交替する $-h_1se/o\text{-}$ と $-se/o\text{-}$ のうち $-h_1se/o\text{-}$ が一般化され、未来形であることをより明瞭にするために、語根のあとにさらに σ が導入されたものと理解できる。 $\pi\lambda\acute{\epsilon}(F)\omega$ “I sail” の未来形の $\pi\lambda\epsilon\sigma\acute{o}\mu\alpha\iota$ を例にとると、この語は $*pleu\text{-}h_1se/o\text{-} > *pleF\text{-}\varepsilon[\sigma]\text{-}o\mu\alpha\iota > *ple\sigma\epsilon o\mu\alpha\iota > \pi\lambda\epsilon\sigma\acute{o}\mu\alpha\iota$ と変化した。¹³⁾このように、ある形式をより明示的に二重に特徴づけようとする傾向 (double characterization) は、印欧語の形態論の至るところでみられる。¹⁴⁾

以上の議論を要約すると、ギリシア語の s -未来は、重複を伴わない e -階梯

の語根が $-(h_1)se/o-$ によって拡張される thematic のタイプであると言える。このタイプは中動態に顕著である。

1.2. 次にインド・イラン語派にみられる願望法 (desiderative) を考えてみよう。願望法は、重複された音節と接辞 $-sa-$ ($< *se/o-$) によって特徴づけられる。語根の母音度に関しては、零階梯が古い状態であったと考えられる。例えば、語根 $bhid-$ “split” (IE. $*bheid-$), $vrt-$ “turn” (IE. $*uert-$), $muc-$ “release” (IE. $*meug-$), $ikṣ-$ “see” (IE. $*h_3ek^{15}-$) の 3 人称単数の形は、次のように導き出される。

$*bhi-bhid-se-ti > bibhitsati$
 $*ui-urt-se-ti > vívṛtsati$
 $*mu-mug-se-ti > múmukṣati$
 $*h_3i-h_3k^{15}-se-toi > ikṣate$ (中動態)

上の例はすべて語根が閉鎖音で終わっているが、喉音を末尾に持つ語根の場合はどうであろうか。例えば、 $pā-$ “drink” (IE. $*peh_3-$), $gā-$ “go” (IE. $*g^eh_2-$), $hā-$ “go forth” (IE. $*gheh_1-$) に関して予想される形は、

$*pi-ph_3-se/o- > **pipiṣa-$
 $*g^i-g^eh_2-se/o- > **jigiṣa-$
 $*ghi-ghh_1-se/o- > **jihīṣa-$

であるが、実際に記録に残っている形は、 $pipiṣa-$, $jigiṣa-$, $jihīṣa-$ と、語根の母音が延張されている。ところが、リグ・ヴェーダには $dhā-$ “put” (IE. $*dheh_1-$) の願望形として、 $didhiṣami$, $didhiṣanti$ など ($< *dhi-dhh_1-se/o-$)、語根の母音の短い形があるので、 $pipiṣa-$, $jigiṣa-$, $jihīṣa-$ の語根の長母音は、二次的な影響を受けたもので、本来は短かかったと考えられる。¹⁶⁾

次に、ソナントで終わる語根を考えてみよう。 $kṛ-$ “make” (IE. $*k^er-$), $van-$ “win” (IE. $*uen-$), $gam-$ “come” (IE. $*g^em-$), $śru-$ “hear” (IE. $*kley-$), $ci-$ “gather” (IE. $*k^ei-$) の願望法は、各々 $cikṛṣati$, $vivāṣati$, $jigāṃṣati$, $śúśrūṣati$, $cikiṣati$ である。これらはすべて、語根部に長いソナントを要請する ($ir < *r$, $a < *ṛ$, $ām < *m$, $ū$, i)。この長いソナントは零階梯の語根に喉音で始まる接辞 $-Hse/o-$ を想定することによって説明される。

$cikṛṣati < *k^irik^rseti < *k^i-k^r-Hse/o-$

vivāsati < **uiuṇseti* < **ui-uṇ-Hse/o-*
jigāmsati < **g^wig^wṁseti* < **g^wi-g^wṁ-Hse/o-*
śúśrūṣati < **kuḱlūseti* < **ku-ḱlu-Hse/o-*
cikīṣati < **k^wik^wiṣeti* < **k^wi-k^wi-Hse/o-*¹⁷⁾

以上のように、サンスクリット語の願望法の形式は、語根末尾がソナントであるか否かに基づく *-Hse/o-* ~ *-se/o-* の交替の原理を立てることによって、統一的に説明される。

イラン側の該当形式を考察してみよう。アヴェスタにおいては、長い母音的ソナントと短い母音的ソナントは違った形で実現される。

**r̥* → Ave. *arə*

**r* → Ave. *arə*

この規則に従えば、ソナントで終わる語根 IE. **dher-* “sustain” と閉鎖音で終わる語根 IE. **dhergh-* “hold” のガーサ・アヴェスタにあらわれる願望形は、各々、次のようにして導かれる。

didarəša- < I-Ir. **dhidhṛša-* < IE. **dhi-dhṛ-Hse/o-*
didarəža- < IE. **dhi-dhṛgh-se/o-*¹⁸⁾

この場合もやはり、語根末のソナントの有無によって *-Hse/o-* と *-se/o-* の交替が支配されていることは明らかである。

これまでのインド・イラン語派の願望形の議論において、接辞 *-Hse/o-* の喉音の種類は指定しなかった。しかし、この *H* は常にソナントを末尾に持つ語根のつぎに生起することから、既に分析したギリシア語の *s-* 未来と並行的に扱いたい。つまり、*H* は *h₁* と同定されるであろう。従って、インド・イラン語派の *s-* 願望法の接辞は、次の形態音素的な分布を示す。

-h₁se/o- / ソナント ____

-se/o- / それ以外の環境

以上の観察から、インド・イラン語派の願望形は、重複を持つ零階梯の語根が *-(h₁)se/o-* によって拡張される thematic のタイプであることが分かる。

記述的にみた場合、*s-* 願望法はインド・イラン語派のみにみられるが、これと全く同じ形成法が、シグマによる未来形成の問題においてこれまでさほど重要な役割を果たさなかった言語に存在する。その言語とは古期アイルランド語である。古期アイルランド語の未来形は共時的に次の5つに大別される。

(1) *f*-未来

(2) 重複をもつ *s*-未来 (reduplicated *s*-future)

(3) 重複をもつ *a*-未来 (reduplicated *a*-future)

(4) *ē*-未来

(5) 重複をもたない *s*-未来 (non-reduplicated *s*-future)

このうち、(1)はシグマ形式とは全く関連のない語幹をとるので、ここでは扱わない。¹⁹⁾ また(5)は、サンスクリット語の願望法とは異なる別のタイプのシグマ形成を示すので、1.4.で考察することにし、ここでは(2)、(3)、(4)について考えてみたい。

まず、(2)の重複をもつ *s*-未来のパラダイムをあげよう。これに属する動詞は、一般に語根が閉鎖音で終わる (*guidid* “prays”, *maidid* “breaks”, *ligid* “licks”)。重複音節の母音は *i* が普通であるが、*a* を持つ語根の前では、*i* は *e* に低下される (e. g. *memais*)²⁰⁾。

sg. 1 -*gigius* < **gigessū* < **gi-ged-sō*

2 -*gigis* < **gigessī* < **gi-ged-se-si*

3 -*gig* < **gigess* < **gi-ged-s-ti*

pl. 1 -*gigsem* < **gigessomes* < **gi-ged-so-mes*

2 -*gigsid* < **gigessete* < **gi-ged-se-te*

3 -*gigset* < **gigessont* < **gi-ged-so-nti*

前アイルランド語 (pre-Irish) で起こった *i*-apocope と語末音節脱落のあと、なお三音節以上を持つ語は、その第二音節を *syncope* によって失った。²¹⁾ 複数形の 1 pl. -*gigsem*, 2 pl. -*gigsid*, 3 pl. -*gigset* はこの *syncope* によって説明される。さて、うえのパラダイムに含まれる形は、インド・イラン語派の願望形と二つの点で異なっている。ひとつは3人称単数の形式が *athematic* であること。連結形 -*gig* < **gi-ged-s-ti*, 絶対形 *gigis* < **gi-ged-s-ti-s*。もしも *thematic* であるならば、連結形 ***-gigis* < **gi-ged-se-ti*, 絶対形 ***gigsid* < **gigessid* < **gi-ged-se-ti-s* となるはずである。もうひとつは、語根が *ē*-階梯の母音度を持つ点である。しかし、これらの二点は、これから述べるように、古期アイルランド語内部の革新であると考えるに十分な根拠がある。より古い起源的な形成法は、(2)の重複をもつ *s*-未来ではなく、(3)の重複をもつ *a*-未来と(4)の *ē*-未来に保存されている。

重複をもつ *a*-未来は、一般に *canid* “sings” や *daimid* “suffers” のように語根がソナントで終わる動詞にみられ、語根に本来長い **a* を付与することで特徴づけられた。例えば、*aigid* “drives” の未来形は、**pel-* という語根から造られる絶対形 *eblaid*, 連結形 *-ebla* を持つ。²²⁾ *-ebla* (*eblaid*) は、祖形として **pip̄seti* を再建することによって無理なく説明される。

-ebla < **piplat* < **piplāhet* < **piplāset* < **pi-p̄-se-ti*

古期アイルランド語は口蓋化 (palatalization) や軟音化 (lenition) など、その先史において、極めて複雑な変革を蒙った。*-ebla* においては、語頭の *p* は古期アイルランド語の規則によって例外なく消失し、重複音節の *e* は後続音節の *a* によって本来の **i* から舌の位置が下げられたもので、*b* と *eblaid* の *d* は母音の後で各々 *p* と *t* から軟音化された。*ahe* → *ā* の変化は、名詞派生の動詞 (denominative verb), 例えば *-māra* “magnifies” < **mārāje/o-* (cf. *mār* “great”) と並行的に扱える。他の変化は、既に述べた *i*-apocope (絶対形では末尾の小辞 *-s* によって、適用が妨げられる) と語末音節脱落によって説明される。祖形の **pi-p̄-se-ti* の語根部の長いソナント *ī* は、ギリシア語の *s-* 未来、インド・イラン語派の願望法の接辞と並行的に理解でき、より古い再構形の **pi-p̄-h₁se-ti* における *!h₁* という連続から生じた。また、もし *-ebla* が本来 *athematic* であるとするなら、絶対形の 3 人称単数として **pi-p̄-s-ti-s* > **eblas(s)* が予想されるが、この形式は存在しない。以上から、*-ebla* は、一見したところ *s* を失っているが、重複をもつ零階梯の語根が *-h₁se/o-* によって拡張された *thematic* の形式から規則的に導き出すことができる。*canid* (IE. **kan* “sing”) の未来形 *-cechna* も、全く同様の祖形を建てることで説明できる。**ki-k̄ṇ-h₁se-ti* > **kik̄ṇset* > **kiknāset* > **kikanāset* > **kixanāt* > **kixnāt* > *-cechna*。但し、**kiknāset* から **kikanāset* への段階において、*a*-階梯の語根は零階梯を避けるという印欧語的傾向によって *a* を再び組み入れている。

(4)の *ē*-未来も、古期アイルランド語内部で多くの変革を受けたが、本来、うたと全く同一の形成法によって造られた。*ē*-未来を取る動詞は、共時的には、重複を持たず、語根は *ē*-階梯によって特徴づけられているように見える。ところが、これらの動詞は、*gonaid* “wounds” や *celid* “conceals” のように、語根がソナントで終わる点で、(3)の重複をもつ *a*-未来と似ているが、さらに語根が *g, c* で始まるものが多いという特徴を持つ。そうすると、*ē*-未来の *ē* は、

重複音節の*e(<*i)が軟音化された語根部初頭の子音の消失によってソナントの前で代償延張を受けたと見做すことができる。これに関して、Thurneysen, *op. cit.*, p. 78 で述べられている規則を定式化すると、次のようになる。

$$\check{V} \begin{Bmatrix} ch \\ \gamma \\ \acute{o} \end{Bmatrix} \longrightarrow \bar{V} / _ \begin{Bmatrix} r \\ l \\ n \end{Bmatrix}$$

この規則に基づけば、*gonaid* (IE. *g^hen-) の未来 -*géna* は次に示すように、(3)の a-未来と全く統一的に説明できる。

$$-géna < *geyna < *gegnāt < *gignāset < *gigñset < *g^hhi-g^hhñ-h₁se-ti$$

この -*géna* (<*g^hhi-g^hhñ-h₁se-ti) は、サンスクリット語の願望形 *jighāmsati* “he wishes to wound” と細部にわたって非の打ちどころのない対応を示す（但し、*ñ→Skt. *a* であるので、*m* は二次的に付与されている）。形式面ばかりでなく、意味的にみても、未来と願望法の比定は全く問題がない。従って、インド・イラン語派の願望法と古期アイルランド語の ē-未来、それに重複を持つ a-未来は、印欧祖語における同一のカテゴリーから来源したことが立証される。²³⁾

それでは、何故、(2)の重複を持つ s-未来が、既に指摘したように、athematic の 3 人称単数を持つ点、そして語根が e-階梯である点で、上の形成法から逸脱しているのであろうか。その解答を捜すことは、それほど困難ではない。ē-未来と重複をもつ a-未来は、ともに語根がソナントで終わる動詞 (CeR-) に特有であるために -h₁se/o- によって拡張され、*Ci-CR_̄-h₁se/o- > *CiC_̄R_̄se/o- > *CiCR_̄ase/o- > *CiCR_̄ahe/o- > *CiCR_̄a- の変化によって、母音間で s を失った。ところが、重複をもつ s-未来の場合は、語根が阻害音 (obstruent) で終わるために (CeT-)、語根末の T が続く s に同化されて、s が存続した。例えば -*gig* < *gigess < *gi-ged-s- にみられるように、*Ci-CeT-s- > *CiCes(s)。従って、s をもつ他の動詞カテゴリー、即ち、s-接続法と s-過去から、重複をもつ s-未来は二次的な影響を受けたと推定できる。

古期アイルランド語の s-接続法と s-過去のパラダイムを、-*guid* “prays” と -*móra* “magnifies” を代表例として各々次に示す。

$$s\text{-subj. sg. 1 } -gess < *gessū$$

$$2 \text{ } -geiss < *gessī$$

- 3 -gé < *gess (< *ged-s-t)
- pl. 1 -gessam < *gessomes
- 2 -gessid < *gessete
- 3 -gessat < *gessont
- s-pret. sg. 1 -mórus < *mā rassū
- 2 -mórais < *mā rassī
- 3 -mór < *mā rass (< *mā ra-s-t)
- pl. 1 -mórsam < *mā rassomes
- 2 -mórsaid < *mā rassete
- 3 -mórsat < *mā rassont

s-未来と異なり，s-接続法とs-過去は重複を伴わないが，三者の類似は顕著である。つまり，既に示したs-未来のパラダイムと比較すれば分かるように，三つのs-カテゴリーにおいて3人称単数のみが **athematic** で，他はすべて **thematic** である。つまり，古期アイルランド語は，s-未来，s-接続法，s-過去の三つのカテゴリーの枠を越えて，パラダイム内部の **thematic** と **athematic** の形式の分布を決定した。それでは，印欧祖語においてs-接続法とs-過去(=s-アオリスト)は，本来どのようなタイプの活用形式を示したのであるか。

ギリシア語とヴェーダのs-アオリストは， $\lambda\omega$ と $bh\check{r}$ - を例にとれば，次のパラダイムが提示される。

- Gk. s-aor. sg. 1 ἔλυ-σα < *-s- \check{m}
- 2 ἔλυ-σας
- 3 ἔλυ-σε
- pl. 1 ἐλύ-σαμεν
- 2 ἐλύ-σατε
- 3 ἔλυ-σα[ν] < *-s- $\check{n}t$
- Ved. s-aor. sg. 1 ábhārṣam < *-s- \check{m} [-m]
- 2 ábhār < *-s-s
- 3 ábhār < *-s-t
- pl. 1 ábhārṣma
- 2 ábhārṣta

3 *ábharsur*

ギリシア語では、1 sg. *-s-m̄* と 3 pl. *-s-nt* からの *-σα* がパラダイムに一般化されているが、本来は *athematic* である。またヴェーダでも、1 sg. の *-sam* < *-s-m̄[-m]* を除いて、*athematic* のパラダイムから規則的に導かれる。

s-接続法については、ヴェーダの *vakṣati* < **ueǵh-se-ti* (*vah-* “carry”), *neṣati* < **nei-se-ti* (*nī-* “lead”) から明らかのように、*thematic* のパラダイムが本来的な姿であった（詳しくは第2章を見られたい）。

以上の観察から、印欧祖語においては、*s*-アオリストは *athematic*, *s*-接続法は *thematic* の活用形式を持っていたことが分かる。従って、古期アイルランド語の三つの *s*-カテゴリーに共通な *athematic* の3人称単数は、*s*-アオリストのタイプの一般化に帰因すると考えられる。他の人称における *thematic* の性格は、インド・イラン語派の願望法と古期アイルランド語の重複をもつ *s*-未来, *a*-未来そして *ē*-未来に発展した祖語のカテゴリー（「未来—願望形」と呼べるであろう）と *s*-接続法の幹母音をもつ *-e/o-* タイプが *s*-アオリストの *athematic* のタイプを駆逐したことに依る。²⁴⁾そして、古期アイルランド語の重複をもつ *s*-未来の正常階梯は、同じ母音度を示す *s*-接続法の影響と見做せるであろう (*s*-未来 *gigis*, *-mema* に対して、*s*-接続法は *geiss* < **ged-se-ti*, *máis* < **mad-se-ti*)。

これまでの議論を要約すると、古期アイルランド語の重複をもつ *s*-未来, 重複をもつ *a*-未来, 及び *ē*-未来は、起源的には単一のカテゴリーに遡り、インド・イラン語派の願望法と構成法において細部にわたり一致する。このタイプは、重複をもつ零階梯の語根が *-(h₁)se/o-* によって拡張される *thematic* な語幹によって特徴づけられる。²⁵⁾

1.3. サンスクリット語の未来形は、重複を示さず、接辞として *-s-* が *-je/o-* によって拡張された形をとる。そして、*vakṣyati* “he will say” < **uekʷ-sje/o-* (< *vac-* “say”) と *kariṣyati* “he will make” < **kʷer-h₁sje/o-* (< *kṛ-* “make”) にみられるように、ここでも、これまで論じた形式と同様の形態音素的交替を示す。

-h₁sje/o- / ソナント _____

-sje/o- / それ以外の環境

アヴェスタにおいても、うへの Skt. *vakṣyati* に対応する未来形語幹は、Gathic Avestan で *va.xšya-* < **uek²⁶⁾-sje/o-* で、構成は全く軌を一にする。但し、アヴェスタでは子音間であらゆる喉音が消失したため ($H \rightarrow \phi/C_C$)、サンスクリット語 *-iṣya-* ~ *-sya-* にみられるような交替はみられない。このことは、Skt. *janiṣyāti* “he will beget” < **ḡenh₁-sje/o-* に対応する Younger Avestan の未来語幹 *zəhya-* が、喉音の以前の存在の痕跡を示さないことから明らかである。

ところで、このサンスクリット語の (*i*)*sya-* 未来は、ヴェーダにおいては決して広く用いられていなかった。MacDonell によれば、リグ・ヴェーダでは僅か15の語根からのみ (*i*)*sya-* 未来が形成されるにすぎない²⁶⁾。接続法と願望法が未来の意味で用いられることが多かったからである。ところが分詞に関しては、事情が変わってくる。MacDonell (*op. cit.*, p. 386f.) が指摘しているように、*vak-syánt-*, *kar-iṣyánt-*, *dā-syánt-* (*dā-* “give”), *han-iṣyánt-* (*han-* “slay”) など多くの語根が未来分詞をとる。

-s- を *-je/o-* によって拡張する未来の形成法は、インド・イラン語派に限定されていない。類似した構成が、バルト語派の主要言語リトアニア語に見いだせる。リトアニア語の未来は、記述的には不定形から *-ti* を除いたものに *-s-* を付与することによって造られる。*dúoti* “give” (< **dō-* < **deh₃-*) を例にとって、未来のパラダイムを次に示す。よく知られているように、リトアニア語には、三人称の動詞において数を区別しないという特徴がある。

sg. 1 *dúosiu* du. 1 *dúosiva* pl. 1 *dúosime*
 2 *dúosi* 2 *dúosita* 2 *dúosite*
 3 *duōs*
 ppl. *dúosiant-*

パラダイムにあげた未来分詞 *dúosiant-* は Skt. *dāsyant-* (< **deh₃-s̥jont-*) に規則的に対応する。さらに、ロシア版の古代教会スラヴ語のテキストに散発的にしかみられない、孤立した分詞 *byšęšt-* / *byšqšt-* “devant être, futur” も同一の構成を示す²⁷⁾。この OCS. の *byšę/qšt-* は、**bhūsje/ont-* が ruki rule によって **byxje/ont-* になり、さらに OCS. の第一口蓋化の規則によって造られた形式で、Lith. *būšiant-* と Ave. *būšiant-* に比定できる²⁸⁾。四つの主要言語の未来分詞が *-sje/ont* を持つ点で一致しているため、この形成法は疑いなく印欧

祖語から伝承したものである。

一方、定動詞に関しては、三人称の *duōs* は $*dōs-t(i)$ に遡り²⁹⁾、 $-je/o-$ をもたない **athematic** の形式という点で孤立しているように見受けられる。しかしながら、一人称、二人称の他の定動詞の形も、 $-i-$ はあるが、幹母音 $*-e/o-$ を持たない点で、同様に孤立している³⁰⁾。従って、よく引用される Skt. *dasyāmi* “I will give” = Lith. *dúosiu* という対応は、リトアニア語が幹母音 $*-e/o-$ を欠いている事実が説明されない限り、サンスクリット語とリトアニア語における類似した個別的発展と考えざるを得ない。

定動詞未来にみられる $-i-$ を、J. Jasanoff は、リトアニア語の歴史時代以前に存在し、三人称単数に駆逐された三人称複数が、本来 **athematic** の $*dōs-nt(i)$ であったと考えることによって説明を試みている³²⁾。つまり、 $*dōs-nt(i)$ は規則的に $*dōs-int(i)$ となるが、この $*dōs-int(i)$ の語幹が $*dōsi-nt(i)$ と再解釈されて $*dōsi-$ がパラダイムに拡がったと提案している。三人称の形式の語幹が無標と解釈されて、パラダイムに画一化されることは、印欧諸言語において極めてよく見られる現象である。例えば、ゴート語の強変化動詞の過去の語尾、dual 1. $-u$, dual 2. $-uts$, pl. 1. $-un$, pl. 2. $-ub$, pl. 3. $-un$ に共通な $-u-$ は、ゲルマン語内部の発達であるが、3 pl. の語尾 $*-nt$ が子音で終わる語幹のあとで $*-nt$ を経て $*-unt$ となった結果生じた $-u-$ に基づくと考えることによって、最も無理なく理解される。

この見方を受け入れるならば、リトアニア語の未来動詞の活用においては、2つの異なったタイプの動詞語幹が相補的に使用されていたことが分かる。すなわち、分詞では $-siant$ によって特徴づけられる **thematic** のタイプ、定動詞形では、3 sg. $*dōs-t(i)$ 、3 pl. $*dōs-nt(i)$ に代表される **athematic** のタイプが **suppletively** に用いられた。そして 3 pl. $*-nt > *-int$ の i が後にパラダイムに拡がった。Lith. $-siant$ と比定されるサンスクリット語の未来分詞の $-(i)sya-$ という接辞は、すでに述べた通り、ヴェーダでは定動詞形には稀で、未来分詞にのみ顕著であった。リトアニア語の **thematic** の $-sia-$ と **athematic** の $-s-$ の分布と並行的に考えるならば、古典サンスクリット語で広く用いられるようになった $-(i)sya-$ を持つ定動詞未来は、未来分詞からの逆成 (**back formation**) である蓋然性が高い。

以上の考察を要約すると、重複を持たず $-(h_1)sje/o-$ によって拡張される

thematic のタイプの未来形は、本来、分詞に特有であったと考えられる。

1.4. リトアニア語の定動詞未来形の本来の構成法は三人称のみに存続し、それは重複のない語幹に接辞 *-s-* が付与される *athematic* のタイプであった。このタイプは印欧語の非常に古い状態を保持していると考えられるが、リトアニア語においては、既に1.1.～1.3. でみた三つのタイプにおけるのと並行的なシグマ接辞の分布（つまりソナントの後では *-h₁s-*、その他の環境では *-s-*）は、二次的な理由で曖昧にされている。ソナントを *R*、母音を *V*、喉音(laryngeal)を *H*、阻害音 (obstruent) を *T* で表わすならば、*TVRT* という構造において、ソナント *R* のあとに喉音 *H* が存在したかどうかは、原則的にはアクセントの違いによって知ることができる。

**TVRT > TVĀT*

**TVRHT > TĀRT*

音韻的には、もし喉音が存在していたなら、直前の二重母音 *VR* は鋭アクセント (acute accent) を持ち、喉音がなければ *VR* に曲アクセント (circumflex accent) が落ちることが期待される。しかしながら、様々な形態論的要因によって、規則的に予測される通りには、曲アクセントと鋭アクセントは分布していない。例えば、未来形 1 sg. *guļsiu* “I will lie down”, 2 sg. *guļsi*, 3. *guļs* は、語根がソナントで終わるために、鋭アクセントを持つ 1 sg. **gūlsiu*, 2 sg. **gūlsi*, 3. **gūls* が予測されるのに、³³⁾ 実際には曲アクセントが落ちている。これは、接辞 *-(h₁)s-* を持たない不定形 *guļti* の曲アクセントが一般化されたためと考えられる。また、不定形 *girti* “to praise” は語根末に喉音を持つ IE. **g^{er}H-* から造られるために鋭アクセントを持つ。そして、未来形に対してもすべて鋭アクセントが予期される (**g^{er}H-s-*)。ところが、1 sg. *girsiu*, 2 sg. *girsi* は規則通りであるが、三人称は *gīrs* と曲アクセントが落ちている。これは、数の区別なく広く使われる三人称の曲アクセントを持つタイプ（例えば、うへの *guļs*）からの二次的影響に帰因すると考えられる。

リトアニア語の定動詞未来形と同一の形成法を示すと考え得る形式は、イタリック語派と古期アイルランド語に見いだせる。

イタリック語派に属するオスク語とウムブリア語に在証される *s-*未来形は、C. D. Buck によれば、次の通りである。³⁴⁾

- Osc. *deiuast* “Lat. *iurabit*, he will swear”
 Osc. *censazet* “Lat. *censebunt*, they will judge”
 Umbr. *prupehast* “Lat. *piabit*, he will honor”
 Umbr. *ferest* “Lat. *feret*, he will carry”
 Umbr. *ostensendi* “Lat. *ostendentur*, they will be exposed”
 Osc.-Umbr. *fust* “Lat. *erit*, he will be”
 Umbr. *furent* “Lat. *erunt*, they will be”
 Umbr. *eest, est* “Lat. *ibit*, he will go”
 Osc. *didest* “Lat. *dabit*, he will give”³⁵⁾
 Umbr. *heriest* “Lat. *volet*, he will wish”
 Osc. *herest* “id.”
 Umbr. *purtuvies* “Lat. *porricies*, you will produce”
 Umbr. *fuiest* “Lat. *fiet*, he will become”

Buck は、*s*-未来をアプリアに *s*-アオリストの短母音接続法 (short-vowel subjunctive) と扱っているために、うゑに挙げた例のうち 2 人称と 3 人称単数を、本来接続法のマーカーである *e* が syncope によって脱落したものと考へざるを得なかった (Buck, *op. cit.*, p. 169)。

Umbr. 2 sg. *-s* < **-ss* < **-ses*

Osc.-Umbr. 3 sg. *-st* < **-set*³⁶⁾

確かに、オスク語とウムブリア語において、多くの語で syncope が生じたことは比較言語学の観点から明らかである。しかしながら、Osc.-Umbr. の *s*-未来が *-se/o-* によって特徴づけられる thematic 活用から来源するという見方を支える実質的な根拠は何もないのである。*s*-未来を先験的に *s*-アオリストの接続法として派生する一般の説は、比較文法の観点からは全く立証されていない仮説である。むしろ、逆に、オスク・ウムブリア語の *s*-未来はもともと *-e/o-* をもたない athematic 活用だったことを示す根拠がある。そのひとつは、隣接する方言 Marrucinians に記録されている現在形 *feret* “Lat. *fert*, he carries” の末尾音節の *e* が syncope を受けていないことである。ウムブリア語の *seste* (Iguvian Tablets II B 23) “Lat. *sistis*, you place” も、**sestes* に遡るとされるが、語末の *e* を保持している³⁷⁾。さらに、より説得力のある根拠が初期ラテン語に見いだされる。初期ラテン語には、*faxō* “I will make”, *capsō*

“I will catch”, *dixō* “I will say” などの ‘future perfect’ と普通呼ばれる *s*-未来形がある。これらは、例えば、1 sg. *faxō*, 2 sg. *faxis*, 3 sg. *faxit* (< **dhh₁k-se/o-*)³⁸⁾ のように、一般には thematic として理解されている。ところが、これに対応する接続法の形 (希求法の接辞 **-ieh₁-*/**-ih₁-* の零階梯の形式 *-i-* < **-ih₁-* を持つ), 1 sg. *faxim*, 2 sg. *faxis*, 3 sg. *faxit* (< **dhh₁k-s-i-* < **dhh₁k-s-ih₁-*)⁴⁰⁾ は明らかに athematic の活用を示す。これらの事実は、*faxō*, *capsō*, *dixō* などの *s*-未来形が汎インド・ヨーロッパ語的に拡がった thematization を蒙り、接続法の *faxim* を伝承形と見做すことで、全く自然に説明される。

fak-s-m (athematic) → *faxō* (thematic)

fak-s-i-m (athematic) → *faxim* (athematic)

従って、同じイタリック語派に属するラテン語からの証拠によって、オスク語とウムブリア語の *s*-未来は、幹母音 **-e/o-* が syncope によって脱落したのではなく (**-se-t* → *-st*), 起源的に athematic であった (**-s-t*) と考えられる。

古期アイルランド語には、重複をもたない点で不規則とされる *s*-未来形が存在する。⁴¹⁾ それらは、6つの語根 **aneg-* “protect”, **leg-* “lie”, **sed-* “sit”, **reg-* “arise”, **ret-* “run”, **tek-* “flee” から、*i*-apocope と語末音群の脱落によって、以下のように造られる。

連結形 3 sg. *-ain* < **aness* < **aneg-s-ti*

連結形 3 sg. *-lee* (= *-lé*) < **less* < **leg-s-ti*

絶対形 3 sg. *seiss* < **sed-s-ti*

連結形 3 sg. *-ré* < **ress* < **reg-s-ti*

絶対形 3 sg. *reiss* < **ret-s-ti*

連結形 1 sg. *-tess* < **tek-s-mi*

これらの六つの形式が 1.2. で考察した古期アイルランド語の重複をもつ thematic の *s*-未来から異なっている点は、重複の欠如だけではない。既にみたように、古期アイルランド語の *s* を持つ三つのカテゴリー (*s*-未来, *s*-過去, *s*-接続法) は、その内部の歴史において、三人称単数のみが athematic で他は thematic になるという独自の変革を受けた。ところが、うえの六つの例のうち最後の *-tess* は一人称単数であるにも拘らず、athematic である。もし thematic であるならば、重複を有する *-gigius* “I will pray” < **gigessū* < **gi-*

ged-sō のように, $u (< *ū < *ō)$ の音色を持つ $**\text{-tius}$ が予期されるが, 実際の形は *-tess* である。三人称単数以外の形式も *athematic* であることから, これらの古期アイルランド語の *s*-未来形は, リトアニア語の *s*-未来定動詞形とイタリック語派の *s*-未来形に比定される重複のない *athematic* のタイプに類別される。

尚, ここで扱ったオスク語, ウムブリア語, 初期ラテン語, 古期アイルランド語の *s*-未来形は, 記録されている形式が限られているために, ソナントで終わる語根を持つものはひとつもない。従って, $-h_1s-$ と $-s-$ の分布に関しては, リトアニア語と同様に何も教えてくれない。しかし, 1.1.~1.3. で観察したのと同様の接辞に含まれる喉音の分布

$-h_1s-$ / ソナント _____

$-s-$ / それ以外の環境

に反する例はひとつも存在しない。

1.5. 本章での考察から, 印欧諸語に広くあらわれる $-s-$ を持つ種々の未来語幹及び願望形語幹は次の4つのタイプに分けられる。

- 1). 重複のない *e*-階段の語根が $-(h_1)se/o-$ によって拡張される *thematic* のタイプ。ギリシア語 *πείσομαι* のように, 中動態に顕著にみられる。
- 2). インド・イラン語派の願望法 (Skt. *virṛtsati*, Ave. *dīdərəža-*), 古期アイルランド語の重複をもつ *s*-未来 ($-gig$), 重複をもつ *a*-未来 ($-ebla$), \bar{e} -未来 ($-géna$) がこのタイプに属する。重複をもつ零階段の語根に接辞 $-(h_1)se/o-$ が付与される *thematic* のタイプである。本来, 能動態に対して用いられた可能性がある。
- 3). 重複のない語根が $-(h_1)sje/o-$ によって拡張される *thematic* のタイプ。インド・イラン語派とバルト・スラヴ語派の未来分詞 (Skt. *vakṣyánt-*, Ave. *būšiant-*, Lith. *dúosiant-*, OCS. *byšęšt-/byšqšt-*) がここに属する。
- 4). リトアニア語, イタリック語派の *s*-未来 (Lith. *duōs*, Osc.-Umbr. *fust*, early Lat. *faxō*), 古期アイルランド語の重複をもたない *s*-未来 ($-ain$) にみられる, 重複のない語根に $-(h_1)s-$ が付与される *athematic* のタイプ。

括弧の中に示された h_1 はソナントで終わる語根の場合にあらわれる。1) の

タイプはギリシア語のみに限られ、孤立しているようにみえる。しかし、アヴェスタの一般に *s*-アオリストの分詞と見做されている形式、例えば、*vanhantam* (< **vansantām* < **uen-h₁s-ont-*) がこのタイプに属するかもしれない⁴²⁾。うえて示した4つのタイプが印欧祖語の初期の段階には単一の構成法をとっていたことを立証することが、将来の詳細な研究によって可能になるかもしれない。例えば、大雑把に言うならば、4)の *athematic* のタイプが最も古く、1), 2), 3)の *thematic* の新しいタイプは、各々、中動態、能動態、分詞に分化して使用されるようになった可能性が考えられる。しかし、本稿ではこの問題をこれ以上に追求せず、未来・願望形は印欧祖語の後期には既に多様な形成法が存在し、十分に確立したカテゴリーであったことを本章の結論として述べるに留めておく。

2. 前章では、シグマを持つ未来形と願望形の印欧祖語における位置について、分派諸言語からのデータに基づいて考察したが、他の二つのカテゴリー、*s*-アオリストと *s*-接続法についてはどうであろうか。本章では、*s*-アオリストと *s*-接続法を確立したカテゴリーとして有する三つの主要言語、ヴェーダ、ギリシア語、古期アイルランド語における両者の関係について分析を試みる。

2.1. ヴェーダではシグマによって特徴づけられるアオリストは200以上の語根から造られ、*s*-アオリスト、*iṣ-*アオリスト、*siṣ-*アオリスト、*sa-*アオリストの4つに類別される。このうち、*s*-アオリストと *iṣ-*アオリストは重要であるが、*siṣ-*アオリストと *sa-*アオリストはサンスクリット内部で二次的に造り出されたものである。

s-アオリストの能動態は延張階梯(インド文法家の術語では *vrddhi*) の語根が *-s-* によって拡張され、それに二次語尾が付く *athematic* な活用を示す。例えば、語根 *vah-* (IE. **ueǵh-*) “carry” から造られる *s*-アオリストの活用は以下の通りである。

sg. 1 *avākṣam* < **e-ueǵh-s-m*

2 *avāt* < **e-ueǵh-s-s*

3 *avāt* < **e-ueǵh-s-t*

pl. 1 *avākṣma* < **e-ueǵh-s-me*

2 *avākṣta* < **e-ueǵh-s-te*

3 *avākṣuh* < **e-ueǵh-s-ŕ*

3人称複数の語尾 *-uh* は, Gathic Avestan の完了形 *cikōitarəš* “they have thought” Y. 32. 11. から判断するとより古くは **-rs* であったと推定できるが, この *-uh* はシグマのアオリストに特有で, すべての3人称複数はこの語尾をとる。⁴³⁾これに対して, すべての *a*-アオリスト (thematic aorist) とほとんどの語根アオリストは, *-an* < **-ant* によって3人称複数が形成される。アヴェスタでは, 他のアオリストの影響によって (e. g. *gəman* “they came”), シグマのアオリストでも *stānhaṭ* “they stood” のように新しい語尾 *-aṭ* < **-nt* によって特徴づけられている。

s-アオリストの中動態は, 能動態が延張階梯 *-ē-* を持つのに対して, *e*-階梯 (インド文法家の術語では *guṇa*) を示す。語根 *stu-* “praise” がとる *s*-アオリスト中動態のパラダイムは次の通りである。

sg. 1 *astoṣi* < **e-steu-s-h₂*

2 **astoṣthāš* < **e-steu-s-th₂e*

3 *astoṣta* < **e-steu-s-to*

pl. 1 **astoṣmahi* < **e-steu-s-medhh₂*

2 *astodhvam* < **astoṣdhvam* < **e-steu-s-dh₂e*

3 *astoṣata* < **e-steu-s-ṇto*

また, 零階梯を示す場合もある。例えば, *srj-* “emit” は次のパラダイムを示す。

sg. 1 *asṛkṣi* < **e-sṛǵ-s-h₂*

2 **asṛṣthāš* < **asṛkṣthāš* < **e-sṛǵ-s-th₂e*

3 *asṛṣta* < **asṛkṣta* < **e-sṛǵ-s-to*

pl. 1 *asṛkṣmahi* < **e-sṛǵ-s-medhh₂*

2 **asṛdhvam* < **asṛkṣdhvam* < **e-sṛǵ-s-dh₂e*

3 *asṛkṣata* < **e-sṛǵ-s-ṇto*

印欧語の母音交替の特徴として, 強階梯が *vṛddhi*, 弱階梯が *guṇa* である時, 弱階梯が *guṇa* から零階梯になる傾向がある。強階梯が *-ē-*, 弱階梯が *-e-* を示す, いわゆる “Narten” タイプの動詞のうち,⁴⁴⁾ 例えば *stu-* “praise” は強階梯の母音度 *-ē-* (1 sg. *staumi*, 3 sg. *stauti* < **stēu-*) に対して, 弱階梯は母音度零 (1 pl. *stumasi* < **stu-*) をとることがある。従って, *srj-* に代表される *s-*

アオリスト中動態の零階梯は本来 *e*-階梯であったと考えられる (**e-slġ-s-* < **e-selġ-s-*)。

s-アオリスト及び *-s-* をもつ他のアオリストは, *s*-未来と *s*-願望法と異なり, ソナントで終わる語根の場合に *h*₁ が *s* の前にあったという証拠は全く見当たらない。

iṣ-アオリストはヴェーダにおいて約 80 の語根に対して用いられている。記述的には語根と *-s-* の間に接続母音 *-i-* が挿入されているだけで, 母音度と語尾は *s*-アオリストと同一である。また, *s*-アオリストとの間に機能的な差異も存在しない。接続母音 *-i-* を差し挿む語根をインドの文法家は *seṭ* 語根と呼んだが, 比較文法の観点からみれば, これは本来喉音で終わる語根形式 *TeRH-* を持ち, 子音の前で語根末の *H* が *ə* を経て *i* になったものである (*TēRH-s-* → *TāRə-s-* → *TāRi-ṣ-*)。 *seṭ* 語根のすべてが, 本来語根末に喉音を持っていたわけではなく, 一般に *seṭ* 語根は *aniṭ* 語根(*-i-* のないもの) に取って代わりサンスクリット内部で拡張される傾向がある (例えば *vid-* “know” (IE. **ueid-*) は未来語幹として *vedīṣya-* をとる)。起源的に *seṭ* 語根である *tṛ-* “pass” (IE. **terH-*) のアオリストのパラダイムは以下の通りである。

sg. 1 **atāriṣam* < **e-tērə-s-ṃ*

2 **atāriḥ* < **e-tērə-s-s*

3 *atārit* < **e-tērə-s-t*

pl. 1 *atāriṣma* < **e-tērə-s-me*

2 **atāriṣta* < **e-tērə-s-te*

3 *atāriṣuḥ* < **e-tērə-s-ṛ*

2 人称と 3 人称単数の長い *i* は代償延張によって説明される。

2 sg. **atāriṣs* → *atāriṣ*

3 sg. **atāriṣt* → *atārit*

iṣ-アオリストのなかには, 能動態で *vṛddhi* (*-ē-*) ではなく *guṇa* (*-e-*) をもつ動詞がある。これらの動詞は本来語根アオリストをとり, *iṣ*-アオリストの一般的な拡張の影響を受けたが, 語根の母音度については本来の *guṇa* が保存された。例えば, *kram-* “stride” は, *guṇa* の *iṣ*-アオリスト 1 sg. *akramiṣam*, 2 sg. *akramiḥ*, 3 sg. *akramit* をとるが, リグ・ヴェーダには語根アオリストの 1 pl. *akramur* が記録されている。⁴⁵⁾

*siṣ-*アオリストは、ヴェーダではわずか7～8の語根にのみみられ、リグ・ヴェーダでは2つの語根 (*yā-* “go”, *gā-* “sing”) からしか造られない。そのパラダイムは次の通りである。

- sg. 1 *ayāsiṣam* < **e-ḷē-sis-ṃ*
 2 **ayāsiṣ* < **e-ḷē-sis-s*
 3 **ayāsit* < **e-ḷē-sis-t*
- pl. 1 **ayāsiṣma* < **e-ḷē-sis-me*
 2 *ayāsiṣta* < **e-ḷē-sis-te*
 3 *ayāsiṣuḥ* < **e-ḷē-sis-r*

延張階梯の語根と語尾の間に **-sis-* がある以外には、*s-*アオリストと *iṣ-*アオリストと異なる点はない。*siṣ-*アオリストはサンスクリット語内部での革新によって生じたもので、本来はふつうの *s-*アオリストであった。*yā-*に関しては、リグ・ヴェーダで *s-*アオリストの形式が在証されている (1 sg. *ayāsam*, 1 pl. *ayāsuḥ*)。 *siṣ-*アオリストは、おそらく、2人称と3人称単数において本来の *s-*アオリストが *s-*アオリストとして明確に認識されるには不十分だったので、*iṣ-*アオリストの影響のもとで *sigmatized* され、それがパラダイム全体に広がったものと考えられる。

- sg. 2 **ayāḥ* < **-s-s* → *ayāsiṣ* < **-s-iṣ-s*
 sg. 3 **ayāt* < **-s-t* → *ayāsit* < **-s-iṣ-t*

以上から、*s-*アオリスト、*iṣ-*アオリスト、*siṣ-*アオリストは起源的には単一のカテゴリーであったと言える。但し、イラン語派においては、喉音は子音間で消失したために、本源的な形式としての *iṣ-*アオリスト、*siṣ-*アオリストは存在しない。

一方、*sa-*アオリストは、語根の母音度と語尾の二つの点で、うえで扱った三つのシグマのアオリストから異なる。

- sg. 1 **adhukṣam* < **e-dhugh-s-o-m*
 2 *adhukṣas* < **e-dhugh-s-e-s*
 3 *adhukṣat* < **e-dhugh-s-e-t*
- pl. 1 **adhukṣama* < **e-dhugh-s-o-me*
 2 **adhukṣata* < **e-dhugh-s-e-te*
 3 *adhukṣan* < **e-dhugh-s-o-nt*

duh- “milk” (IE. **dheugh-*) によって示される *sa-*アオリストのパラダイムはうえの通りである。*sa-*アオリストはリグ・ヴェーダで7つの語根 *kruś-* “cry out”, *guh-* “hide”, *duh-* “milk”, *ruh-* “ascend”, *mṛj-* “wipe”, *mṛś-* “touch”, *vṛh-* “tear” のみから造られ、さらに *duh-* は *s-*アオリスト中動態 3 pl. *ádhuḥṣata*, *ruh-* は *a-*アオリスト *áruhat* もとるので、*sa-*アオリストは印欧祖語に遡らない新しく成立した形式と考えられる。しかも、*-s-*を除けば、語根の零階梯、幹母音 **-e/o-* の存在、3人称複数語尾 **-nt* の点で、*a-*アオリストと全く同一の形成法を示す。従って、本来は *a-*アオリストで、後に ⁴⁶⁾ *sigmatized* されたと考えるのが自然な解釈である。

以上は直説法でのシグマ形成の考察だったが、他の法に関してはどうか。希求法 (optative) では、能動態においてはシグマ形成はみられず、語根アオリスト希求法が用いられた。⁴⁷⁾ しかしながら、中動態では *s-*アオリスト希求法が記録されている。

sg. 1 *bhakṣīya* < **bheḡ-s-ih₁-h₂e*

sg. 3 *bhakṣīta* < **bheḡ-s-ih₁-to*

これは *bhaj-* “divide” から造られる例であるが、このような *s-*アオリスト希求法の例は極めて稀で、祖語におけるその存在は疑わしい。

ところが、接続法に関しては事情が異なり、能動態でも中動態でも非常によく用いられている。その構成法は、能動態では、直説法が *ē-*階梯の語根をもつ *athematic* のタイプであるのに対して、接続法は *e-*階梯の語根に接続法の接辞 **-e/o-* が付与されている。他方、中動態では、直説法、接続法ともに *e-*階梯を示す。

直説法能動態 3 sg. *avāt* < **e-ueḡh-s-t* (*vah-* “carry”)

接続法能動態 3 sg. *vakṣati* < **ueḡh-se-t-i*

直説法中動態 3 sg. *ayaṣṭa* < **e-jeḡ-s-to* (*yaj-* “pray”)

接続法中動態 3 sg. *yakṣate* < **jeḡ-s-e-to-i*

この *s-*接続法は非常に生産的で、語根によっては直説法では *s-*アオリストとして存在せず、接続法においてのみ *-s-* を持つものが少なくない。例えば、*sad-* “sit”, *dā-* “give”, *pr-* “pass” の三つの語根について、*s-*接続法の形 *satsat*, *dāsat*, *parṣat(i)* は在証されているが、対応する *s-*アオリストの予想される形 ***asāt*, ***adāt*, ***apar* は記録されておらず、各々、*a-*アオリスト *asadat*, 語

根アオリスト *adat*, 重字アオリスト (reduplicated aorist) *apīparam* (1 sg.) として存在する。また、よく *s*-アオリストとして引用される動詞についても、直接法よりもむしろ接続法において在証されていることが多い。リグ・ヴェーダでは、例えば、*yam*-“reach”においては *yamṣat* などの接続法は22例、それに対して *ayan* などの直説法は15例である。また *vah*-“carry”については、*vakṣat* などの接続法は21例、ところが直説法は *avāt* の1例のみである。

以上の分析から、*s*-接続法は *s*-アオリストを基本にして派生的に導き出されるという一般の見方は裏づけを持たず、むしろ *s*-アオリストよりも *s*-接続法の方が確立したカテゴリーではなかったかという推定が可能になる。そして、この考えをより確かなものにする言語事実がヴェーダ内部に見いだせるのである。

ヴェーダには、伝統的には命令法と見做されている *-si* をもつ形式が23の語根から約150例記録されている。これらは *yakṣi* “sacrifice” (34×), *vakṣi* “carry” (25×), *parṣi* “bring across” (16×), *neṣi* “lead” (10×), *darṣi* “pierce” (10×), *satsi* “sit” (10×), *rāsi* “bestow” (8×) などである。G. Cardona は、これらの形式が3人称単数の *s*-接続法と最も密接に関連していることを指摘した (*yakṣi* / *yakṣat*, *vakṣi* / *vakṣat* など)⁴⁸⁾。これを受けて O. Szemerényi は、統語的な観点からこの説を支持した⁴⁹⁾。つまり、*prá yát samudrámāti śūra pārṣi pāráyā turvásaṃ svastí* RV 1. 174. 9 “when you, mighty (Indra), cross the ocean, take Turvaśa safely” などの例を挙げ、ヴェーダでは命令法は主文にのみあらわれるのに、*-si* をもつ形式は従属文で使われているために、この形式は接続法に相違ないと述べた。そしてさらに、*yakṣi* などの *-si* をもつ形は純粹の *s*-接続法 *yakṣasi* などから haplology によって造られた形であると主張した。Cardona は、慎重な態度をとりながらも、Szemerényi の考えを受け入れ、機能的な立場からこの考えを精密化し発展させた⁵⁰⁾。

形態論的立場からも、*yakṣi* に代表される共時的に接続法として機能する2人称単数形は、*guṇa* を示すので、本来の *-sasi* (< **-sesi*) の接続法の接辞 **-e/o-* を含む音節が脱落したと考えて問題はない。従って、この *-si* の形式を考慮に入れるなら、ヴェーダにおいては *s*-アオリストよりも *s*-接続法の方が広く使用されていたという見方がより有力なものになるであろう。

2.2. ギリシア語の *s*-アオリストはヴェーダと同じく *athematic* の活用を示す。

- sg. 1 ἔγραφα < *e-graph-s-*ŋ*
 2 ἔγραφας < *e-graph-s-s
 3 ἔγραφες < *e-graph-s-e
 pl. 1 ἐγράφαμεν < *e-graph-s-men
 2 ἐγράφατε < *e-graph-s-te
 3 ἔγραφαν < *e-graph-s-*ŋt*

3人称単数を除いて、パラダイムに拡がった -σα は、1 sg. *s-*ŋ* > -σα, 3 pl. *s-*ŋt* > *σατ に基づく。3人称複数では -σατ ではなく -σαν があらわれているが、これは未完了の語尾 -ον の影響により τ が ς に取って代わられたと考えられる。3人称単数語尾 -σε に関しては、語末の *t が脱落した(*-set → *-se) と見做すよりも、注(8)での分析と同じ線に沿って、古い状態がそのまま保持されていると考えたい。サンスクリット語と比較すると *iṣ-*アオリスト、*siṣ-*アオリスト、*sa-*アオリストに相当するシグマアオリストの下位範疇がない点が違うが、サンスクリット語と決定的に異なる点は、ギリシア語の s-アオリストが語根に延張階梯を持たないことである。ἔτεινα “I stretched” などにみられる εῖ [ē] は、-s- の消失に伴う代償延張によるもので、母音交替とは関係がない (*é-ten-s-*ŋ* > *ἔτενσα > ἔτεινα。cf. 未来形 τευέω < *τεν-εσω < *ten-h₁s-ō)。

一方、s-接続法（いわゆる、s-アオリストの接続法）の活用は、古典ギリシア語では次の通りである。

- sg. 1 γράφω < *graph-s-ō
 2 γράφης < *graph-s-ē-
 3 γράφη < *graph-s-ē
 pl. 1 γράφωμεν < *graph-s-ō-
 2 γράφητε < *graph-s-ē-
 3 γράφωσι(ν) < *graph-s-ō-

記述的にみれば、すべての形式が -s- の後の -ē/ō- によって拡張されている。ヴェーダでは s-接続法を特徴づけるのは -sa- (< *-se/o-) であるので、両言語間で母音の長さに差があることに気づく。これに対して接続法の現在は、athematic の εἶμι “go” と thematic の φέρω “bear” を例にとれば、以下のようである。

- sg. 1 ἴω φέρω

	2	ἴης	φέρης
	3	ἴη	φέρη
pl.	1	ἴωμεν	φέρωμεν
	2	ἴητε	φέρετε
	3	ἴωσι(ν)	φέρωσι(ν)

athematic, thematic とともに、やはり長い η/ω を語根の後に持つ。ヴェーダと古典ギリシア語の接続法を比べると、次の通りである。

	ヴェーダ	古典ギリシア語
接続法現在 (athematic)	-a- (<i>asati</i>)	-η/ω- (<i>ἴωμεν</i>)
接続法現在 (thematic)	-ā- (<i>bharāti</i>)	-η/ω- (<i>φέρωμεν</i>)
s-接続法	-sa- (<i>vakṣati</i>)	-ση/ω- (<i>γράφωμεν</i>)

印欧祖語の接続法の接辞が *-e/o-, 幹母音が *-e/o- であることから判断すると、ヴェーダにおいては、thematic の接続法現在 *-ē/ō- (幹母音 *-e/o- と接続法接辞 *-e/o- との融合), athematic の接続法現在 *-e/o-, s-接続法 *-se/o- がそのまま伝承されているのに対して、古典ギリシア語では thematic の接続法現在の母音が長い *-ē/ō- が athematic の接続法現在と s-接続法に拡がっていることが分かる。

この点でホメーロスの短母音接続法 (short vowel subjunctive) は古い様相を呈している。これは短い -e/o- を語尾の前に挿入することによって造られ、本来 *mi*-活用を示す athematic 動詞に特有である。Homeros ἴωμεν は *εἶμι*⁵²⁾ “go” の接続法 1 人称複数の形で、古典期ではうえでみたように ἴωμεν となる。また φθίεται は φθίω “decline” (cf. アオリスト ἐφθίτο) の接続法 3 人称単数中動態の形で、古典期では φθίηται である。この短母音接続法は、Chantraine によると、とりわけ s-接続法に顕著にみられる。このことは、ギリシア語においてほとんどの動詞が thematization を受け、athematic の *mi*-動詞が極く僅かしか存続していないことを考えるなら、容易に理解されるであろう。ホメーロスの短母音 s-接続法の例をいくつか示す。

βήσομεν < *-s-o-men (直説法 βαίνω “go, walk”)

ἀλγήσετε < *-s-e-te (直説法 ἀλγέω “feel pain”)

ἀμείψεται < *-s-e-to-i (直説法 ἀμείβω “change”)

συμβλήσεται < *-s-e-sa-i (直説法 συμβάλλω “throw together”)

このうち、*συμβλήσεαι* は *s*-接続法のみであらわれ、対応する *s*-アオリストは存在せずに、アオリストとしては語幹アオリスト *συνέβαλον* が使われている点で興味深い。これは、*sad-* “sit” の *s*-接続法 *satsat* は存在するが、アオリストとしては *a*-アオリストの *asadat* が用いられるという 2.1. でみたヴェーダにおける事実と全く並行的である。

以上の考察を要約すると、ギリシア語では *s*-アオリストはサンスクリット語と同様に *athematic* で、*-s-* の前に *h₁* が存在した名残りはない。但し、サンスクリット語と異なり、どの法においても語根は延張階梯を示さない。*s*-接続法については、本来短い *-ε/o-* を *σ* のあとに伴い、ホメーロスでは非常によく用いられていた。

2.3. 古期アイルランド語の *s*-過去は、名詞派生の動詞 (*denominative verbs*) に代表されるすべての弱変化動詞 (*weak verbs*) において形成される。これは、ギリシア語で名詞派生の動詞が *s*-アオリストをとるのと同様である (cf. *ἐτίμησα* “I honored” < *τιμή* “honor”, *ἐφίλησα* “I loved” < *φίλος* “love”).

- sg. 1 *-mórus* < **mā rassū*
 2 *-mórais* < **mā rassī*
 3 *-mór* < **mā rass*
- pl. 1 *-mórsam* < **mā rassomes*
 2 *-mórsaid* < **mā rassete*
 3 *-mórsat* < **mā rassont*

うへの *móraid* “magnifies” (< *már, mór* “great”) のパラダイムから分かるように、3人称単数の **-s-t* が **-ss* に同化され、これが活用全体に広がっている。既に1.2. で述べたように、古期アイルランド語のシグマを持つカテゴリーはすべて、3人称単数だけが *athematic* で、他は *thematic* である。しかし、サンスクリット語やギリシア語などから判断すれば、古期アイルランド語の *s*-過去は本来 *athematic* のパラダイムを有していたと考えられる。ただ、サンスクリット語と異なり、*athematic* でありながら母音交替を示していない。

s-過去以外に、古期アイルランド語には、印欧語のなかで孤立している *t*-過去 (*t-preterite*) と呼ばれるものがある。例えば *berid* “bears” は、1 sg. *-biurt*, 2 sg. *-birt*, 3 sg. *-bert* と活用する。*t*-過去の起源について、Thur-

neysen は印欧語の語根アオリストに遡ると述べているが⁵³⁾、何故 *-t-* がパラダイム全体に拡がったのかなど不明な点が残る。*t-*過去が *-l, -r, -m, -g* に終わる動詞語根のみにあらわれるという独自の分布に注目して、C. Watkins はこの問題を見事に⁵⁴⁾ 解明した。*t-*過去は起源的には *s-*過去と同一で、*-l, -r, -m, -g* で終わる語根の場合、3人称単数語尾 *-t* の前で *-s-* が⁵⁵⁾ 消失した。その結果、本来語尾である *-t* が零語尾を持つ語幹の末尾子音と再解釈されパラダイム全体に拡がった。この過程を図式的に示すと次のようになる。

sg. 1 **ber-s-ū* → **bert-ū* → *-biurt*
 2 **ber-s-ī* → **bert-ī* → *-birt*
 3 **ber-s-t* → **ber-t* → **ber-t-φ* → **bert-φ* → *-bert*

語根 **bher-* は本来 *durative* な意味を持ち、アオリストに特有な *punctual* なアスペクトを示さないため、古くは現在語幹のみに限られていた (Lat. *pres. ferō* : *pf. tulī*, Gk. *pres. φέρω* : *aor. ἔνεκα*)。ところが、古期アイルランド語では *t-*過去において用いられているために、この点からも、二次的動詞に特有であることに加えて、*t-*過去 (= *s-*アオリスト) が比較的新しい時代に造られたということが分かる。

*s-*接続法のパラダイムは既に1.2.に示した。Thurneysen (*op. cit.*, p. 391) は、*s-*接続法をホメーロスの *ἐρύσσομεν, τίστετε* やサンスクリット語の *darṣati* や *neṣatha* に比定できる *s-*アオリストの接続法と説明している。しかしながら、*s-*過去がもっぱら二次的な動詞から形成されるのに対して、*s-*接続法は強変化動詞 (*strong verbs*) においてのみ用いられ、両者の分布は同一ではない。つまり、*s-*接続法が *s-*アオリストから派生されたとみるのは不可能である。これに対して、Watkins は *s-*アオリストの直説法から直接 *s-*接続法が⁵⁶⁾ 来ると主張する。彼の考えによれば、*TER-* と *TERE-* のタイプの語根は、各々 *t-*過去と *s-*過去をとったが、*TET-* と *TERT-* のタイプの語根については、印欧語の完了が一般化され、本来の *s-*アオリストはアスペクトの対立を失い、法の対立に関与するようになった。こうしてできたのが、*s-*接続法であり、直説法に対立する法として機能し、*TE(R)T-* のタイプの語根から希求法に遡る *a-*接続法を⁵⁷⁾ 駆逐した。しかし、この Watkins の考えには無理がある。H. Rix が指摘しているように、アスペクトの対立を担うカテゴリー (*s-*アオリスト) が法の対立に関与するカテゴリー (*s-*接続法) へどのようなプロセスを経て意

味的に変化したかを跡づけることは極めて難しい。Watkins は、*s*-接続法が *s*-アオリスト直接法をそのまま伝承するという自説を支持する根拠として、三人称単数が *s*-過去や *t*-過去と同様に **athematic** であることを指摘している⁵⁸⁾。既に述べたように、三人称単数が **athematic** であることは古期アイルランド語のシグマのカテゴリーに共通の革新であるので、この指摘は何ら彼自身の説を支持する根拠とはならない。それどころか、逆に *s*-接続法が **thematic** であったことを示す証拠がある。

古期アイルランド語の *téit* “goes” (IE. **steigh-*) という動詞は *s*-接続法をとり、次のようなパラダイムを示す。

- sg. 1 *-tías* < **tēssū*
 2 *-téis* < **tēssī*
 3 *-té* < **tēss*
- pl. 1 *-tíasam* < **tēssomos*
 2 *-tésid* < **tēssete*
 3 *-tíasat* < **tēssont*

3人称単数の *-té* を **athematic** のタイプから来源すると考えるならば、祖形 **steigh-s-t(i)* > **tēgst(i)* が再建される。ところが、*t*-過去の分析において述べたように、*gst* という子音結合は *ss* とならず、*s* が脱落して *gt* となる (*agid* “drives” の *t*-過去は *-acht* < **agt* < **ag-s-t*。lention によって *gt* から生じた語末の *-cht* は存続する⁵⁹⁾)。従って、**athematic** と再建された **tēgst* は決して **tēss* > *-té* とはならず、**tégt* > ***-tiacht* が予期される。ところが実際の形は ***-tiacht* ではなく、*-té* であるので、*-té* は本来 **athematic** ではなかったと言える。一方、**thematic** と考えるならば **tēg-se-t(i)* > **téssid* が再建される。この **téssid* が、前アイルランド語 (pre-Irish) の時期に、**athematic** になった **gess* (< **ged-s-t*) のタイプの影響によって、**téss* (< **téssid*) と変形された⁶⁰⁾ と考えるなら、末尾子音の脱落によって *-té* が無理なく導かれる。こうして、*s*-接続法が本来 **thematic** であったことが立証されるならば、*s*-アオリストが *s*-接続法に置き換わったという Watkins の説は崩壊してしまう。

以上の考察から、古期アイルランド語の *s*-接続法は *s*-アオリストと何らかの派生関係にあったとは見做し難く、サンスクリット語やギリシア語の *s*-接続法と同様に、既に古くから用いられていたと考えるのが自然な解釈であろう。

さらに、*s*-接続法の起源的な古さを示す別の事実がある。

古期アイルランド語には、語根の末尾子音が脱落している（語根にアクセントがない連結形の場合には母音も脱落）点で共時的には不規則とされている6つの命令形がある。⁶¹⁾これらは *at-ré* (= *-ré*) “arise”, *aic(c)* “invoke”, *no-m-ain* “spare me”, *tog* “choose”, *tair* “come”, *to-n-fóir* “help us” である。Thurneysen はこれら6つの不規則な命令法を *s*-アオリストの指令法 (injunctive) の2人称単数形に遡ると考えている。しかし、注(20)で述べたように、指令法はインド・イラン語派に特有のカテゴリーで、印欧祖語に存在しなかった蓋然性が高いので、この考えは受け入れ難い。これよりも有力な見方は、既に2.1.で扱ったヴェーダの *-si* をもつ命令法と並行的に haplology を受けた *s*-接続法と見做す考えである (cf. Vedic *yakṣasi* → *yakṣi*)⁶²⁾。

at-ré < **ad-reg-si* < **ad-reg-se-si*

aic(c) < **agge* < **ad-ged-si* < **ad-ged-se-si*

no-m-ain < **-ane* < **-aneg-si* < **-aneg-se-si*

tog < **to-gō* < **to-geus-si* < **to-geus-se-si*

tair < **to-ar(e)-i* < **to-are-ink-si* < **to-are-ink-se-si*

to-n-fóir < **-fo-re* < **-fo-ret-si* < **-fo-ret-se-si*

この見方に従うならば、*s*-接続法が古期アイルランド語でも古い起源を持つカテゴリーであることが一層明らかになるであろう。

以上の議論をまとめると、古期アイルランド語においては、*s*-アオリストはギリシア語と同様に *athematic* であるが母音交替を示さず、名詞派生などの二次的な動詞に特に好まれる比較的新しいカテゴリーである。これに対して、*s*-接続法は本来 *thematic* であるが、強変化動詞から造られ、その起源は古いと考えられる。⁶³⁾

2.4. サンスクリット語、ギリシア語及び古期アイルランド語における *s*-アオリストと *s*-接続法についての本章での考察を要約すれば、伝統的には *s*-アオリスト直説法から導き出されるとされている *s*-接続法は既に共通基語の時期に十分確立されていた。それに対して、*s*-接続法がそこから派生されると従来思われていた *s*-アオリストの方が、むしろ新しく誕生したカテゴリーであると考えられる。

3. 第1章及び第2章での考察から次の二つの点が明らかになった。すなわち、後期印欧祖語の時代において、未来・願望形が多様なシグマ形成法を持っていたこと、及びs-接続法が既に十分に確立したカテゴリーとして存在していたことである。この二つの観察は、s-未来はs-アオリストの短母音接続法から派生されたという一般に普及している説に対して重大な疑問を投げかける⁶⁴⁾。この伝統的な説には従来から難点がなかったわけではない。最も大きな問題は、s-アオリスト以外のアオリストをとる動詞が何故s-未来と結びつくのかということである。例えば、語幹アオリスト ἔσχον, ἔλιπον をとる ἔχω “have”, λείπω “leave” が何故各々 s-未来 ἔξω, λείψω を取るのかが説明できない。ところが、前二章での考察に基づき、s-未来・願望形とs-接続法が歴史的にみてs-アオリストよりも早く確立していたという見方をするならば、この問題は解消する。そして、実際にs-アオリストが起源的に最も新しいということを示す言語事実を明確に提示する言語がある。それらは、いずれも今世紀になって解読されたヒッタイト語とトカラ語 A, B である。本章はまずこれらの言語と他の印欧語のs-アオリストとの関係についての議論から始めよう。

3.1. ヒッタイト語の動詞体系は共時的観点からみると極めて単純である。態に関しては能動と中動の区別が明瞭に存続しているが、法については直説法と命令法、時制については現在と過去の対立のみで、印欧祖語に再建される接続法や希求法の区別はなく、また固有の未来形も存在しない。能動態の動詞は2つのクラス、*mi*-動詞と *hi*-動詞とに大別される⁶⁵⁾。*mi*-動詞と *hi*-動詞は、形態的には単数の現在と過去において互いに異なるが、機能的には両者の間に差異はない。*mi*-動詞が他の印欧語の *athematic* の能動態に対応することは容易に理解されるが、ヒッタイトに独自の *hi*-動詞の起源はまだ未解決であり、現在の印欧語比較文法における最も重要で困難な問題であるといえよう⁶⁶⁾。このヒッタイト語の動詞体系はs-アオリストの先史の解明に大きな役割を果たすと考えられるので、2つの動詞クラスをやや詳細に論じてみよう。

Friedrich, *op. cit.* や Kronasser, *op. cit.* の文法書では、動詞の活用表の特定の位置に二つ以上の異なった語尾の形式が与えられているために、これらの形式が全く恣意的に交替するという印象を持つ。ところが、近年のヒッタイト文献学の成果に基づいて、粘土版を厳密に時代区分してデータを再検討するなら

ば、従来は自由変異 (free variation) をなすと見做されていたいくつかの形式が、実は400年に及ぶヒッタイト内部の歴史的变化を反映していることが分かるのである。⁶⁷⁾ 以下においては、最も古いと考えられる形式を中心にして議論を進める。まず *mi*-動詞の活用を *ep*- “grasp” (*ija*- “make”) を代表形にして示す。

- pres. sg. 1 *epmi* < *-*m*+*i*
 2 *epši* < *-*s*+*i*
 3 *epzi* < *-*t*+*i*
- pl. 1 *eppuēni* < *-*me*(*n*)+*i*
 2 *epteni* < *-*te*(*n*)+*i*
 3 *appanzi* < *-*ont*+*i*
- pret. sg. 1 *eppun* < *-*an* < *-*am* < *-*m*
 2 (*ijaš*) < *-*s*
 3 *epta* < *-*t*
- pl. 1 *epuēn* < *-*me*(*n*)
 2 *epten* < *-*te*(*n*)
 3 *eppir* < *-*ant* < *-*ont*

印欧語の能動態動詞においては、現在形に付与される一次語尾は過去形に付与される二次語尾に小辞 *-i* を付けることによって造られる。うへの *mi*-動詞の語尾は、伝統的な比較文法で再構成されている *athematic* の語尾からそれほど困難なく導き出される。但し、過去の1人称単数と3人称複数においては、予想される ***-an* と ***-ant* ではなく、*-un* と *-ir* (*-er*) があらわれるが、これらは本来の形式ではなく、*hi*-動詞の影響を受けたものと考えられる。また、過去1人称単数語尾は、Benveniste が言う通り、⁶⁸⁾ 子音で終わる語幹の後では *-un*、母音の後では *-nun* という共時的な形態音素的交替を示すが、歴史的には *-un* が古く、より明示的に1人称単数であることを示すために *n* が挿入されて *-nun* が造られた。⁶⁹⁾ ***-an* (< *-*m*) が *-un* に取って代わられたのは *hi*-動詞1人称単数の *-hun* に基因すると考えられる(詳細は後述)。Friedrich, *op. cit.* は2人称単数過去の語尾として本来の *-š* に加えて *-t* と *-ta* を挙げている。*-ta* は *hi*-動詞の2人称単数語尾と同一で二つの動詞活用の混同から生じたと推定できる。他方、*-t* は *mi*-動詞の3人称単数から後に移されたと思

われるが、その動機は今の段階では不明である（もちろん *-ta* の *a* はヒッタイト語の書記法の限界から、実際には発音されなかった場合も十分考えられる。cf. *ešta* < **est* “he was”）。尚、後期ヒッタイト語において、*-t* が同一テキストの同じ動詞に対して 2 人称単数にも 3 人称単数にも使用されているのは興味深い（*[šu]-ul-li-ja-at* “you strove” KUB I 4 III 36, *šu-ul-li-ja-at* “he strove” KUB I 10 III 14）。

mi-動詞が *athematic* の能動態とかなり規則的に対応するのに対して、*hi*-動詞については語尾だけをとってもその歴史に関して学者間の意見の一致はみられない。以下において、*hi*-動詞の語尾の起源についての私見を述べたい。*hi*-動詞 *šak-* “know” は次のように活用する。

- pres. sg. 1 *šakḥi* < *-ḥe* < **-hai* < **-h₂e + i*
 2 *šakti* < **-te* < **-tai* < **-th₂e + i*
 3 *šakki* < **-e* < **-ei* < **-e + i*
- pl. 1 *šekkueni* < **-me(n) + i*
 2 *šekteni* < **-te(n) + i*
 3 *šekkanzi* < **-(e)r*
- pret. sg. 1 *šaggahḥun* < **-h₂u(?)*
 2 *šakta* < **-th₂e*
 3 *šakkiš* < **-e*
- pl. 1 *šekkuen* < **-me(n)*
 2 **šekten* < **-te(n)*
 3 *sekkir* < **-(e)r*

複数形は現在でも過去でも *mi*-動詞と同じ語尾を持つ。3 人称複数の現在では *mi*-動詞の語尾 *-anzi* (< **-(o)nti*) が一般化されているが、過去形は *-(e)r* によって特徴づけられている。*-r* を持つ動詞語尾は決して *hi*-動詞だけに孤立してあらわれるわけではない。インド・イラン語派の完了形の 3 人称複数語尾, Skt. *-uḥ* < **-r(s)*, Ave. *-arə* < **-r*, *-arəš* < **-rs* に加えて、ラテン語の完了形, 例えば *dixēre*, *-ērunt* “they said” にも保存されている⁷⁰⁾。またヴェーダの中動態現在の 3 人称複数の古い形式 *duhre* “they milk”, *šere* “they lie” にみられる *-re* は **-ro + i* から来源するが、この **-ro* も本来の **-r* に 3 人称単数語尾 **-o* (cf. *śaye* “he lies” < **keḷ-o-i*) が付与された⁷¹⁾と見做すことができる。

さらにトカラ語 B *stare* “are” (< **stare*) < **sth₂-ro* にも, *-r* を持つ中動態語尾が残っている。これらの事実は, 完了, 中動態そして *hi*-動詞の 3 人称複数語尾が本来すべて *-r* によって特徴づけられていたことを示唆する。

athematic の能動態を除いた他の動詞カテゴリーの語尾の相互の類似は 3 人称複数に限られていない。ヒッタイト語の *hi*-動詞の現在 1 sg. *-hi*, 2 sg. *-ti*, 3 sg. *-i* は, 形態的にみれば, 完了形の語尾 1 sg. **-h₂e*, 2 sg. **-th₂e*, 3 sg. **-e* (Skt. 1 sg. *-a*, 2 sg. *-tha*, 3 sg. *-a*, Gk. 1 sg. *-α*, 2 sg. *-θα*, 3 sg. *-ε*), 中動態の語尾 1 sg. **-h₂(e)*, 2 sg. **-th₂e*, 3 sg. **-o* (Hitt. 1 sg. *-ha(ri)*, 2 sg. *-ta(ri)*, 3 sg. *-(t)a(ri)*, Vedic 1 sg. *-e* < **-a-i*, Toch. A [B] 2 sg. *-tar [-tar]*, Vedic 3 sg. *-e* < **-o-i*) 及び thematic の能動態の語尾 1 sg. **-o-h₂(e)*, 2 sg. *-e-th₂e*, 3 sg. **-e* (Gk. 1 sg. *-ω*, Lat. 1 sg. *-ō*, Toch. A, B 2 sg. *-t*, Gk. 3 sg. *-ε*) と粉れもない類似を呈している。*hi*-動詞, 完了, 中動態及び thematic の能動態が, どのような過程を経て後期印欧祖語の時代において機能的に分化したかは不明な点が多く, 内的再建に基づく今後の研究に委ねなければならない。しかしながら, 印欧語の動詞体系を有機的に理解するためには, これらの 4 つのカテゴリーが本来単一の起源に由来するという見方が問題の解明に対し⁷²⁾最も有望な視野を開くであろう。

この見方に立てば, ヒッタイト語の *hi*-動詞の現在は, 1 sg. **-h₂e-i*, 2 sg. **-th₂e-i*, 3 sg. **-e-i* から出発し, 規則的に 1 sg. **-hai*, 2 sg. **-tai*, 3 sg. **-ei* になった。次に, 語末での二重母音 **Vi* は規則的に **e* になるので⁷³⁾ これらは各々, 1 sg. **-he*, 2 sg. **-te*, 3 sg. **-e* となる。このうち 1 sg. *-he* は実際に古期ヒッタイト語に記録されている。*iḡannahhe* “I march”, *memahḫe* “I speak”, *peḫḫe* “I give”, *dahḫe* “I take”, *tarnahḫe* “I leave”, *teḫḫe* “I put”, *ašaḫḫe* “I settle”, *gangahḫe* “I hang”, *išpantahḫe* “I libate”。しかし, 圧倒的多数は 1 sg. *-hi*, 2 sg. *-ti*, 3 sg. *-i* をとる。この変化は, パラダイムのほとんどの位置において語尾が末尾に *-i* を持つこと, とりわけ *mi*-動詞の 1 sg. *-mi*, 2 sg. *-ši*, 3 sg. *-zi* の影響によると見做するのが最も自然な解釈であろう。

hi-動詞の過去形については, 1 人称単数は現在形から小辞 **-i* を取り除いた **-h₂e* から導かれる **-ha* が期待されるが, 実際の形は *-hun* である。末尾の鼻音は *athematic* の能動態の語尾から移されたものであろうが, 何故 *u* が語尾にあらわれるのかが理解し難い。他の言語で *u* があらわれる動詞語尾は

ヴェーダの完了形の1人称と3人称単数にみられる。*dadhau* (< *dhā-* “put”), *dadau* (< *dā-* “give”), *tasthau* (< *sthā-* “stand”), *papau* (< *pā-* “drink”) 等。*hi-*動詞と完了の語尾の形態的類似とうえの例のうち *dhā-* と *dā-* が *hi-*動詞であることを考慮するならば、ヒッタイト語において1人称単数語尾にみられる *u* は未来 *hi-*動詞に固有であった可能性が強い。⁷⁴⁾

Friedrich (*op. cit.*, p. 77) は2人称単数に対して規則的な語尾 *-ta* 以外に *-š* と *-šta* を与えている。また同様に3人称単数についても2人称単数と同じ三つの形式 *-š*, *-ta*, *-šta* を与えている。Watkins は 3.2. で考察するトカラ語過去第3類との表面的な比定だけに基づいて、これらの三つの3人称単数語尾のうち *-š* が最も古いと考⁷⁵⁾えた。しかしながら、*-š*, *-ta*, *-šta* の相互の歴史的関係を明らかにしようとする実証的な研究は未だ誰によっても発表されていない。より体系的な研究は別の機会に譲らねばならないが、筆者が調査した古期ヒッタイトの粘土版に記録されたテキストでは、*hi-*動詞の過去3人称単数はすべて *-s* で特徴づけられている。

a-ar-ša KBo XXII 2 Rs. 7 (*ar-* “arrive”)

a-ra-iš KBo III 22 Vs. 12 (*arāi-* “raise”)⁷⁶⁾

ja-an-ni-iš KBo XXII 2 Rs. 7 (*iḡannāi-* “march”)⁷⁷⁾

pa-iš KBo III 22 Rs. 47; KBo XXII 2 Vs. 17 (*pāi-* “give”)

pe-e-da-aš KBo XXII 2 Vs. 4; KBo III 22 Vs. 40 (*pēda-* “carry”)

šu-un-na-aš KBo XXII 2 Vs. 2 (*šunna-* “fill”)

da-[a-aš] KBo III 22 Vs. 6 (*dā-* “take”)

ta-a-li-iš KBo XXII 2 Rs. 14 (*tala-* “leave”)

tar-na-aš KBo XXII 2 Vs. 3; KBo XVII 1 III 5; KBo XVII 3 III 5
(*tarna-* “leave”)

これ以外に *hi-*動詞の3人称単数過去に *ḡa-a-aš-ta* KBo XXII 2 Vs. 1, 6, 12, 13 (*ḡaš-* “bear”) と *ták-ki-iš-ta* KBo III 22 Vs. 8 (*takš-* “undertake”) という語尾 *-ta* をとる形があるが、これらは語根が *š* で終わっているために語尾 *-š* が避けられ、本来 *mi-*動詞の3人称単数語尾 *-ta* が用いられていると考えられる。これに対して、後期ヒッタイト語のオリジナルの粘土版には *pāi-*, *šunna-*, *tala-* という *hi-*動詞の3人称単数過去の形として、うえの古期ヒッタイトの *pa-iš*, *šu-un-na-aš*, *ta-a-li-iš* ではなく、*pi-eš-ta* KUB I 1 I

18, *šu-un-ni-iš-ta* KUB I 1 II 79, *da-a-li-iš-ta* KUB XIV 16 I 11 という語尾 *-šta* をもつ形式が在証されている。この *-šta* は、本来 *hi*-動詞と *mi*-動詞各々に特有な *-š* と *-t(a)* の後期ヒッタイトにおける混交 (contamination) と見做すことができる。2 人称単数の二次的に造られた語尾 *-š* と *-šta* の *š* の要素についても、おそらく *mi*-動詞の *-š* が転移したものであろう。

ここでは大雑把にしか述べることができなかつたが、Friedrich が歴史的観点を考慮せずに与えている *-š*, *-ta*, *-šta* という三つの語尾は、2 人称と 3 人称において本質的に互いに異なった歴史を持っているのである。⁷⁸⁾ とりわけ、本稿での議論に極めて重要であるのは、ヒッタイト語の最も古い段階では *hi*-動詞の 3 人称単数だけが *-š* で特徴づけられている事実である。

3.2. 3.1. でみた古期ヒッタイト語における *-š* の分布は、孤立して考えてみた場合には問題の解明にあまり大きな役割を果たさないように思える。ところが、古期ヒッタイト語と全く並行的な特徴はトカラ A と B の両言語に見いだせるのである。Krause-Thomas, *op. cit.* によって過去第 3 類と分類されたクラスの能動は、例として A *prak-*, B *prek-* “ask” をとるならば、次のように活用する。

	A	B
sg. 1	<i>prakwā</i>	<i>prekwa</i>
2	<i>prakāšt</i>	<i>prekasta</i>
3	<i>prakäs</i>	<i>preksa</i>
pl. 1	<i>prakmäs</i>	<i>prekam</i>
2	* <i>prakäs</i>	* <i>prekas</i>
3	<i>prakär</i>	<i>prekar</i>

他のクラスの過去形語尾と比較した場合、3 人称単数以外はすべてのクラスに共通の語尾 A [B] 1 sg. *-ā*, *-wā* [*-wa*], 2 sg. *-št* [*-sta*], 1 pl. *-mäs* [*-m*], 2 pl. *-s* [*-s*], 3 pl. *-r* [*-r(e)*] によって一般に特徴づけられる。ところが、3 人称単数だけが他のクラスと異なり、A *-s*, B *-sa* という *s* を持つ独自の語尾をとる。過去第 3 類の起源に関して、Krause-Thomas (*op. cit.*, p. 247) は印欧語の *s*-アオリスト、完了そして語根アオリストが混合したものと述べている。これに対して、Lindeman は、トカラ語の過去第 3 類のパラダイムは本来 *s*-ア

オリストから来源したもので (1 sg. **(e)-prēks-ŋ*, 2 sg. **(e)-prēks-s*, 3 sg. **(e)-prēks-t*), 過去第 1 類に特有の要素 **-ā-* が移されたことにより *athematic* の性格を失い (**prēksā-*), 後に 3 人称単数以外は印欧語の完了形 (**pe-prōk-*) の影響を受けて *-s-* を失ったと考⁷⁹⁾えている。Krause-Thomas と Lindeman に共通しているのは, トカラ語の過去第 3 類は起源的な形式がそのまま伝承されたのではなく, 多くの変形を蒙って誕生したと見做している点である。

他方, 過去第 3 類の中・受動は次のように活用する。

	A	B
sg. 1	<i>prākse</i>	<i>parksamai</i>
2	<i>prāksāte</i>	<i>parksatai</i>
3	<i>prāksāt</i>	<i>parksate</i>
pl. 1	<i>prāksāmät</i>	<i>parksamt(t)e</i>
2	<i>prāksāc</i>	<i>parksat</i>
3	<i>prāksānt</i>	<i>parksante</i>

パラダイムのすべての位置で語幹は零階梯をとっている(共通トカラ語 **pärk-s-ā- < *prk̄-s-*)。トカラ語 A では *-rk-* という子音連続が許されないために *metathesis* を起こしている (**pärk- → prāk-*)。トカラ語 B では初頭音節にアクセントが落ち, *ä → a* の変化を受けている⁸⁰⁾。パラダイムから明らかなように, 能動とは異なりすべての形式が *-s-* を持っている。ところが, トカラ語 A には中・受動態として *-s-* のない形式を持つ点でうえのパラダイムから逸脱しているいくつかの動詞がある。それらは *nāk-* “destroy, perish”, *pāk-* “cook, ripen”, *tsāk-* “burn” などである(中・受動 3 人称単数は各々 *nakät*, *pakät*, *tsakät*)。これらを古い時代の残存形と判断すれば, トカラ語の過去第 3 類は本来能動態の 3 人称単数のみが *-s-* を有していたと推定できる。これは古期ヒッタイト語の *hi-* 動詞の過去形にみられた *-š-* の分布と全く同一である(ヒッタイト語も中動態過去に *š-* を欠いている)。多くの重要な点で印欧語の古い特徴をよく留めているヒッタイト語とトカラ語において, *-s-* の分布が完全に並行的であるのは単なる偶然とは言えないであろう。つまり, サンスクリット語やギリシア語にみられるような, パラダイム全体が *-s-* によって特徴づけられる古典的アオリストが, ヒッタイト語とトカラ語において種々の変化を蒙った結果, 3 人称単数の能動のみに *-s-* が限られるようになったと見做すよりも,

ヒッタイト語とトカラ語における状態の方がむしろ古いと考える方が遙かに自然な解釈と言えるであろう。s-アオリストの -s- は本来能動の3人称単数にのみ固有に存在したのであって、印欧諸語におけるその広い分布は、-s- が後に語幹の一部と再解釈され、類推的にパラダイム全体に拡がった結果なのである。

3.3. トカラ語 A 3 sg. *präksät*, B 3 sg. *parksate* に代表される -s- を持つ過去第3類の中・受動が零階梯の語幹をとることは既に3.2. でみた (< **prk̄-s-*). それでは対応する能動態の語幹の母音度はどうであろうか。Lindeman, *op. cit.* はアプリアに A *prakäs*, B *preksa* をサンスクリット語の *aprat* に比定し、*(e)-*prēk-s-t* を再構成している。しかしながら Toch. A *a* と B *e* は共通トカラ語の **ä* [Δ] で表記される母音に遡り、**ä* は印欧語の **ē* だけでなく **o* からも由来するのであるから、トカラ語の過去第3類能動の語幹の母音度が本来延張階梯 **ē* であったか、正常階梯 **o* であったかは容易に決め難い。この決定に関して、トカラ語 A は非常に重要な形式を保存している。それは 3 sg. *ñakäs* “he destroyed”, 3 pl. *ñakär* “they destroyed” (< *näk-*) である。トカラ語では二次的な形態的要因により、その先史に生じた口蓋化の音質が失われていることが多い。しかしながら、文献に口蓋化された音が記録されている場合には、それは古い状態を反映していると考えられる。うへの 3 sg. *ñakäs* と 3 pl. *ñakär* の *ñ* は明らかに語根の *ē*-階梯を示している。

s-アオリストの語幹の *ē*-階梯は、他の三つの主要言語にも見いだせる。2.1. でみたように、ヴェーダでは単数、複数の区別なく能動態が *ē*-階梯、中動態が *e*-階梯を持っている。ラテン語の完了は、語尾に関する限りでは(注)70で示したように印欧祖語の完了を継承するが、語幹は種々のタイプがみられる。そのうち -s- を持ち重複を示さないタイプは s-アオリスト起源と考えられるが、一般に母音度 *ē* を示す。

現在	<i>regō</i> “rule”	完了	<i>rēxi</i> < * <i>rēg-s-i</i>
	<i>tegō</i> “cover”		<i>tēxi</i> < *(s) <i>tēg-s-i</i>
	<i>uehō</i> “carry”		<i>uēxi</i> < * <i>uēgh-s-i</i>

古代教会スラヴ語にも s-アオリストは用いられている。例えば、*rekō* “I say” (< **rek-*) は次のように活用する。

- sg. 1 *řěxǔ* < **rĕk-s-o-m* < **rĕk-s-ŋ*
 2 *reče* < **rek-e-s*
 3 *reče* < **rek-e-t*
- pl. 1 *řěxomǔ* < **rĕk-s-o-mos* < **rĕk-s-mos*
 2 *řěste* < **rĕk-s-te*
 3 *řěšę* < **rĕxint* < **rĕk-s-ŋt*

2人称と3人称の単数形だけは、未完了過去から来源するため短い *e* (< **e*) を語根に持ち、*-s-* の痕跡もない。しかし、他は語根の母音として *ĕ* (< **ĕ*) を持ち、*ruki rule* (**ks* → **kx* → *x*) と第一口蓋化規則によって変容を受けているが、語根の後には **-s-* を持っていた。*ruki rule* は *s* の次に子音が後続する場合には適用されないので、*s-*アオリストは本来 *athematic* であったが1人称の単数と複数は *thematization* を蒙り、幹母音 **-o-* が挿入されたと考えられる。3人称複数に関しては、音節的な **ŋ* が **in* になってから *ruki rule* が働き、次に第一口蓋化が起こったと説明されるが、注目すべきは語尾として再建される **-ŋt* で、これは本来 *s-*アオリストが能動態複数で語尾にアクセントが落ちない *acrostatic* タイプの母音交替をしたことを示唆する。*s-*アオリストの能動態の3人称複数がアクセントのない零階梯の語尾をとっていたことは、サンスクリット語の 3 pl. *-uh* < **r(s)* によっても支持される。

C. Watkins は、インド・イラン語派とスラヴ語派とラテン語に特有の *ē*-階梯が各分派言語で独立して起こった並行的現象であると考え、共通基語に遡らないことを示すためにそれぞれの言語に対して様々な二次的な変化を提案している。⁸¹⁾しかし、Watkins の考えは以下の理由で受け入れることができない。まず、Watkins の著作は1962年に出版されたもので、母音交替に関しては Kuryłowicz の理論に大きく依存している。⁸²⁾しかし、当時に比べて現在では母音交替についての理解は飛躍的に進展している。Kuryłowicz は、延長階梯は印欧祖語の最も新しい時期にようやくあらわれ、その祖語における存在は疑わしいと考えていたが、現在では *ē*-階梯が祖語で十分に確立していた母音交替のタイプに用いられていたことが明らかになっている。動詞では既に述べたいわゆる “Narten” タイプ (e. g. 3 sg. **stĕu-ti* “he praises”, 3 pl. **stĕu-ŋti* “they praise”), 名詞では「肝臓」を意味する語、主格 **ĵĕk*-r*, 属格 **ĵĕk*-ŋ-s*⁸³⁾ (Skt. *yákr̥t*, *yakṇáh*; Gk. *ἥπαρ*, *ἥπατος*) などに *ē*-階梯があらわれる。こ

れらは強形 $-ē-$: 弱形 $-e-$ の *acrostatic* タイプの母音交替を示す。従って、 $ē-$ 階梯の祖語における存在が立証された以上、Watkins はその議論の出発点の基盤を失ったことになる。

また、Watkins は Benveniste の語根理論に基づき⁸⁴⁾、 $s-$ アオリストの $-s-$ を拡張子と見做している。Benveniste は、 $e-$ 階梯の語根と零階梯の接辞からなる語幹を *state I* (e. g. Lat. *augeō* < $*h_2éu-ǵ-$), それに対し零階梯の語根と $e-$ 階梯の接辞に任意に拡張子 (*enlargement*) が付いたものを *state II* (e. g. Gk. *ἄεξω* < $*h_2u-éǵ-s-$) と呼んでいる。 $s-$ アオリストの $-s-$ が常に弱階梯であらわれ交替をしないことに基づき、Watkins は $s-$ アオリスト、例えば $*preks-$ “asked” を *state II* $*pr-ek-s-$ であると分析している。しかしながら、形式的な面は別として、この説明では $-s-$ の機能やそれが用いられるに至った動機が全く明らかにされない点に大きな限界がある。 $s-$ アオリストの起源の解明には $s-$ 未来、 $s-$ 接続法を含めたシグマ形成全体からみた有機的なアプローチが必要である。

後期印欧祖語の時期に $s-$ アオリストのパラダイムの一部が $ē-$ 階梯によって特徴づけられていたことは、うえてみた三つの主要言語における事実から疑う余地がない。Skt. *avakṣam* = Lat. *uēxi* = OCS. *věšv* “I carried” の見事な対応は粉れようもなく延長階梯 $*uēǵh-s-$ を示している。またすでに述べたトカラ語 A の事実からも印欧祖語における $s-$ アオリストの $ē-$ 階梯は保証される。次に問題になるのは、印欧祖語の後期において $s-$ アオリストのパラダイムのどの部分が $ē-$ 階梯で特徴づけられていたかである。サンスクリット語と古代教会スラヴ語の $s-$ アオリストの 3 人称複数語尾、Skt. $-uh$ < $*-r(s)$, OCS. $-ę$ < $*-int$ < $*-nt$ は、既にみたように、零階梯で本来の活用が *acrostatic* タイプであったことを示唆する。これまで明らかにされている動詞の *acrostatic* タイプの母音交替で、しかも $ē-$ 階梯を持つものは、“Narten” タイプ (強形 $-ē-$: 弱形 $-e-$) 以外には存在しない。そうするとヒッタイト語とトカラ語 A, B を考慮に入れずに、仮説的に再構成される古典的 $s-$ アオリストの能動態活用は次のようになる。

sg. 1 $*uēǵh-s-m$	pl. 1 $*uēǵh-s-me$
2 $*uēǵh-s-s$	2 $*uēǵh-s-te$
3 $*uēǵh-s-t$	3 $*uēǵh-s-nt$

もちろん、このパラダイムはいくつかの言語における語尾の形式やヒッタイト語とトカラ語における *-s-* の分布を満足に説明しない。しかし“Narten”タイプと見做すことによって、語幹の母音度については、サンスクリット語、ラテン語、古代教会スラヴ語そしてトカラ語の延張階梯は単数形の **-é-* が能動態に一般化されたと説明される（トカラ語中・受動態の零階梯は本来 *e-* 階梯であった）。他方、延張階梯を示さないギリシア語や古期アイルランド語などの言語では、能動態複数と中動態の **-é-* が拡張されたと考えることができる。問題はヒッタイト語とトカラ語にみられる事実とうえのパラダイムをどのように結びつけて、統一的に説明するかである。

3.4. 既に 3.1. と 3.2. で、古期ヒッタイト語の *hi-* 動詞過去とトカラ語過去第 3 類はともに 3 人称単数だけに **-s-* を持つ点で一致しているということを観察した。さらに、ヒッタイト語とトカラ語の間の共通点はこれだけに限られていないことを以下で示そう。

3.3. でトカラ語過去第 3 類は能動態が *e-* 階梯、*-s-* を持つ中・受動態が *e-* 階梯から二次的に生まれた零階梯によって特徴づけられていることをみた。これに対して、トカラ語 A に在証される、中・受動態としてはより古い *-s-* のない形式の語根の母音度を分析してみよう。該当する形式は、3 sg. *nakät*, 3 pl. *nakänt* (< *näk-* “destroy”), 3 sg. *tsakät*, 3 pl. *tsakänt* (< *tsäk-* “burn”), 3 sg. *pakät* (< **päk-* “cook”) である。トカラ語 A の *a* は印欧語の **ē* と **o* から来源する二つの可能性がある。*näk-* から造られる能動態 3 sg. *ñakäs* と 3 pl. *ñakär* は、初頭の口蓋化された *ñ* によって、*e-* 階梯を持つことは既にみた。他方、うえにあげた同じ語根から造られる中・受動態の 3 sg. *nakät* と 3 pl. *nakänt* は口蓋化された音質を示さないため、*o-* 階梯の **nok-* を想定させる。同じことが口蓋化された *ś* ではなく *ts* を持つ 3 sg. *tsakät*, 3 pl. *tsakänt* にも当てはまり、*o-* 階梯の **dhog^h-* が再構形として考えられる。3 sg. *pakät* については、**p* は後続する母音の種類に拘らず *p* であらわれるので、*e-* 階梯か *o-* 階梯か確実に決定することは不可能である。しかし、他の *-s-* のない中・受動の形式と並行的に *o-* 階梯と考えて何ら反証となる事実は見いだせない。

トカラ語過去第 3 類を形成する動詞の多くは、*-s-* をもつ thematic の現在形のクラスに属する (e. g. A 1 sg. *praksam*, B 3 sg. *prekšäm* < A [B])

prak-〔*prek-*〕 “ask”）。このクラスは共時的には Krause-Thomas, *op. cit.* によって現在第8類と分類されているが、その起源は明らかではない。現在第8類においては、過去第3類と異なり *-s-* はパラダイム全体に拡がっている。本来 *athematic* であった過去第3類で *-s-* が3人称単数に限られていることを除けば、現在第8類と過去第3類の関係は形成法において印欧語の *s-* 接続法と *s-* アオリストの関係に類似している。

Toch A [B] pres. VIII *praksam* [prekšäm] < **-s-e/o-*

pret. III *prakäs* [preksa] < **-s-*

Vedic Skt. *s-subj.* *yakṣat* < **-s-e/o*

s-aor. *ayāt* < **-s-*

つまり、いずれも *-s-* によって拡張されているが、トカラ語の現在第8類と印欧語を代表するヴェーダの *s-* 接続法は *thematic* で、トカラ語の過去第3類とヴェーダの *s-* アオリストは *athematic* である。この事実を重視するなら、トカラ語の現在第8類は印欧語の *s-* 接続法を継承すると考えることが可能である。さらにこの見方をとれば、トカラ語現在第8類と過去第3類における *-s-* の分布の相違が、印欧祖語において *s-* アオリストよりも *s-* 接続法の方がカテゴリーとしてより確立していたという第2章でみた事実をよく反映していることが理解できる。

さて *-s-* をもたない過去第3類の中動態は、3人称単数に *-s-* をもつ能動態が *e*-階梯を示すのに対して、*o*-階梯を示すことは既にうえで述べた (cf. Toch. A 能動 3 sg. *ñakäs*, 3 pl. *ñakär* : 中・受動 3 sg. *nakät*, 3 pl. *nakänt*)。このタイプの動詞 (*näk-*, *tsäk-*) は、現在第8類において、Toch. B 能動 3 sg. *nakšäm*, 1 sg. *tsaksau*, 中・受動 3 sg. *tsakštär* という形式を記録に残している。これらの動詞の語根は *a* を示すが、Toch. B の *a* はこの場合共通トカラ語のアクセントの落ちた **ä* に遡り、この **ä* は印欧祖語の **e* から来源する。すなわち、印欧語の *s-* 接続法を伝承するトカラ語の現在第8類は *e*-階梯によって特徴づけられている。以上の分析を語幹の母音度の点から要約すると次のようになる。

-s- をもつ過去第3類 (= 印欧語 *s-* アオリスト)

—— 能動単数, 複数 *e*-階梯 : 中動 *e*-階梯 (> 零階梯)

-s- のない過去第3類 (= 印欧語でのカテゴリー?)

——中動 *o*-階梯 (能動も?)⁸⁵⁾

現在第 8 類 (= 印欧語 *s*-接続法)

——能動, 中動とも *e*-階梯

これは同一語根が異なる語幹において示す母音度である。さて, *-s-* のない過去第 3 類と現在第 8 類はそれぞれ *o*-階梯と *e*-階梯を一般化しているが, 本来はどのような母音交替を示していたのであろうか。これと類似した現象は名詞においてもみられる。印欧語の「足」を意味する語はギリシア語では *o*-階梯 (単数主格 *πός*, 単数属格 *ποδός*), ラテン語では *e*-階梯 (単数主格 *pēs*, 単数属格 *pedis*) を一般化しているが, 印欧祖語においてはパラダイムのなかで **o~*e* の交替をする *acrostatic* タイプのアプラウトを示していた (単数主格 **pód-s*, 単数属格 **péd-s*)⁸⁶⁾。これと並行的に, *-s-* のない過去第 3 類と現在第 8 類は, 本来パラダイムのなかで強形 (能動単数) が *o*-階梯, 弱形 (能動複数と中動) が *e*-階梯という同一の母音交替を示していたが, 後に前者は *o*-階梯, 後者は *e*-階梯を一般化したと推定することが可能である。

トカラ語の事実に基づいて提案したこの仮説はヒッタイト語によって支持を得る。ヒッタイト語 *hi*-動詞には, 強形が *a* (< IE. **o*), 弱形が *e* または *i* (< IE. **e*) の母音交替を示す一連の動詞がある。それらは *ak-/ek-* “die”, *ašaš-/ašeš-* “settle”, *haš-/heš-* “open”, *k(a)rap-/k(a)rip-* “eat”, *šak(k)-/šek(k)-* “know”, *ar-/er-* “come” である。**o~*e* アプラウトを示すこのタイプの動詞は, 印欧諸語においては限られた数のヒッタイト語 *hi*-動詞にしかみられない。しかしながら, このタイプが印欧祖語で生産的なクラスであったことが Jasanoff によって論じられている⁸⁷⁾。例えば, **melH-* “grind” という語根を考えると, ゴート語とリトアニア語は *o*-階梯をとる *thematic* の形式, Goth. *malan*, Lith. *malù* を示す。これに対して, 古期アイルランド語と古代教会スラヴ語は *e*-階梯の OIr. *melid*, OCS. *meljo* をとる。これらの語根の母音の違いは, 分派諸言語は **e* か **o* の母音のいずれか一方を活用において一般化したか, 本来は **molH-~*melH-* のアプラウトを示していたと考えることによって, 極く自然に理解できる。そしてこれと同様に説明できる例は数多く見いだせるのである⁸⁸⁾。

ak-/ek- に代表される *hi*-動詞と現在第 8 類と *-s-* のない過去第 3 類中動に属するトカラ語 *näk-*, *tsäk-* は, 能動の 3 人称単数に独自の *-s-* に加えて,

固有の $*o \sim *e$ アプラウトを示す点で一致する。従って起源的には同一のクラス (1 sg. $*-h_2e$, 2 sg. $*-th_2e$, 3 sg. $*-e$ によって特徴づけられる) から来源したと考えられる。この見地に立つと、印欧語の s -アオリストは $*o \sim *e$ の “Jasanoff” タイプの基本形からアプラウトの型を $*\bar{e} \sim *e$ の “Narten” タイプに変えることによって導き出される。

sg. 1 $*m\acute{o}lH-h_2e$	pl. 1 $*m\acute{e}lH-me$
2 $*m\acute{o}lH-th_2e$	2 $*m\acute{e}lH-te$
3 $*m\acute{o}lH-e$	3 $*m\acute{e}lH-ʔ$
↓	
sg. 1 $*m\acute{e}lH-h_2e$	pl. 1 $*m\acute{e}lH-me$
2 $*m\acute{e}lH-th_2e$	2 $*m\acute{e}lH-te$
3 $*m\acute{e}lH-e$	3 $*m\acute{e}lH-ʔ$

接辞を用いる派生方法を外派生 (external derivation) と言うならば、このようなアプラウトのタイプの変化による派生方法を内派生 (internal derivation) と呼ぶことができる。 s -アオリストを造りだす内派生は本来 $*o \sim *e$ アプラウトのクラスに限られていたが、やがて $*\bar{e} \sim *e$ アプラウトを示す s -アオリストは他のクラスにも (とりわけ名詞派生の二次的動詞に) 広がった。この内派生のプロセスは、うえで述べたように、トカラ語とヒッタイト語から窺い知ることができるが、ヒッタイト語では他の言語と異なり、基本形の影響により \bar{e} -階梯は取り除かれ、現在形のアプラウトの型を過去形にも一般化している。ここで提案した内派生という概念は決してアドホックなものではない。次の節では印欧語名詞において内派生が果たす役割について考えてみたい。

3.5. Meillet の時代には、母音交替は語尾と語尾直前の要素 (語根名詞では語根、接辞をもつ名詞では接辞) の間に起きると考えられていた⁸⁹⁾。ところが最近の印欧語比較研究は、祖語に様々のアプラウトのタイプが存在していたことを徐々に明らかにしている。名詞のアプラウトの研究は近年進展したとはいえ、まだ不明な点が多い。最大の困難は、祖語にかつて存在したアプラウトの強形と弱形が特定言語の記録のうえにそのまま保持されていることは極めて稀で、多くの場合各分派言語が強形か弱形のいずれか一方を一般化したり、別の二次的変形を蒙っている点にある。しかしながら、少なくとも次に示すタイプの

アプラウトがかつて存在していたことは確実である。以下において R, S, E は各々語根 (root), 接辞 (suffix), 語尾 (ending) を表わす。

1) 語根名詞 語根名詞には, アクセントが強格で語根, 弱格で語尾に落ちるタイプ(a)と, 強格でも弱格でも語根に落ちるタイプ(b)がある。⁹⁰⁾

a) 強格 R(é)-E(φ) : 弱格 R(φ)-E(é)

Skt. Gk.

単数主格 *diéu-s “sky” *dyáúh* Ζεός

〃 属格 *diu-és *diváh* Δι(F)ός

b) 強格 R(ó)-E(φ) : 弱格 R(é)-E(φ)

Skt. Gk. Lat.

単数主格 *pód-s “foot” *pāt* πός *pēs*

〃 属格 *péd-s *padaḥ* ποδός *pedis*

a) は, ギリシア語の属格が一般化された語尾 -os をとる以外は, サンスクリット語でもギリシア語でも祖形のアプラウトを直接伝承する稀な例である。 b) では, ギリシア語が強格の o-階梯, ラテン語が弱格の e-階梯を一般化しているが, 本来は語根が *o~*e のアプラウトを示していた。⁹¹⁾

次に接辞をもつ名詞について考える。⁹²⁾

2) acrostatic タイプ このタイプにも二種類想定される。

a) 強格 R(ó)-S(φ)-E(φ) : 弱格 R(é)-S(φ)-E(φ)

Gk. Lat.

単数主格 *gón-u “knee” *γόνυ* *genū*

〃 属格 *gén-u-s *γουνός* *genūs*

(< *γον-(F)-ός)

b) 強格 R(é)-S(φ)-E(φ) : 弱格 R(é)-S(φ)-E(φ)

Skt. Gk. Lat.

単数主格 *iék*-r “liver” *yákr̥t* ἥπαρ *iecur*

〃 属格 *iék*-ṛ-s *yakṇáh* ἥπατος *iecinoris*

(< *-ṛ-(t)os) (< *iecinis)

3) proterokinetic タイプ

強格 R(é)-S(φ)-E(φ) : 弱格 R(φ)-S(é)-E(φ)

Lat. OIr.

単数主格	<i>*h₁néh₃-m_n</i> “name”	<i>nōmen</i>	<i>ainm</i>
			(< <i>*anmen</i>)
〃 属格	<i>*h₁nh₃-mén-s</i>	<i>nōminis</i>	<i>anmae</i>
			(< <i>*anmens</i>)

4) hysterokinetic タイプ

強格 R(ϕ)-S($\acute{\epsilon}$)-E(ϕ) : 弱格 R(ϕ)-S(ϕ)-E($\acute{\epsilon}$)

		Skt.	Gk.	Lat.
単数主格	<i>*ph₂-tér</i> “father”	<i>pitá</i>	<i>πατήρ</i>	<i>pater</i>
〃 属格	<i>*ph₂-tr-és</i>	<i>pitúh</i>	<i>πατρός</i>	<i>patris</i>
				(< <i>*ph₂-tr</i>)

5) amphikinetic タイプ

強格 R($\acute{\epsilon}$)-S(*o*)-E(ϕ) : 弱格 R(ϕ)-S(ϕ)-E($\acute{\epsilon}$)

		Ave.	Skt.
単数主格	<i>*pént-oh₂-s</i> “way”	<i>pantā</i>	<i>pánthah</i>
〃 属格	<i>*pnt-h₂-és</i>	<i>paθo</i>	<i>patháh</i>

これらのアプラウトのタイプは本来語幹の種類をこえて存在したと考えられるが、それらがいかなる機能的な対立を担っていたかはまだ十分明らかではない。しかし、アプラウトのタイプの対立が種々の名詞の派生過程において重要な役割を果たしたことは間違いない。次にこの内派生のプロセスが明白にみられる例をいくつか与える。

まずギリシア語にみられる複合語、例えば *εὐ-πάτωρ* “born of a noble sire”, *εὐ-ήνωρ* “giving manhood” を考えてみよう。これらの基本形は *πατήρ*, *ἀνήρ* (< **h₂n-ér*) で、ともに hysterokinetic タイプに属する。ところが対応する複合語の後分は接辞が *o*-階梯を示している。この *o*-階梯は音韻的には説明できないし、形態的な影響も考えられない。そうすると、*εὐ-πάτωρ* と *εὐ-ήνωρ* という複合語は基本形の hysterokinetic タイプのアプラウトを amphikinetic タイプに変えることによって派生されたと考えるより他はない（うえてみたアプラウトのタイプのうち、接辞に *o*-階梯を持つのは amphikinetic タイプだけである）。

また Whitney は *-as* (< **-es*) を持つサンスクリット語の中性名詞、例えば *yásas* “glory”, *ápas* “work”, *táras* “quickness” が語根にアクセントを持つ

に対して、対応する形容詞は *yaśás* “glorious”, *apás* “active”, *tarás* “quick” のように *-ás* にアクセントが落ちることを観察している。⁹³⁾ これらの名詞と対応する形容詞は同一の語幹を一般化しているが、アクセントの位置を重視するならば、名詞は本来 *proterokinetic* タイプ (e. g. *yaśás* < **iék-s-*) に属し、形容詞は *hysterokinetic* タイプ (e. g. *yaśás* < **ik-és-*) に属していたと推定できる。すると、*-as* をもつ中性名詞から形容詞を派生する際に、*proterokinetic* タイプから *hysterokinetic* タイプへのアプラウトの変化が関与していることが分かる。

内派生の例をもうひとつだけ示す。J. Schmidt の研究以来、印欧語の中性複数⁹⁴⁾が起源的には集合名詞であったことはよく知られている。集合名詞の形成には接辞 *-h₂* を用いる以外に、内派生による方法がある。「水」を表わす中性名詞の単数において、ヒッタイト語主格・対格 *uatar* と属格 *uītenaš* は粉れなく *acrostatic* タイプの母音交替 **uód-r~*uéd-n-s* を示している。これに対して、対応する複数（集合名詞）としてヒッタイト語は *uidar* を持つが、この形式は *amphikinetic* タイプ **uéd-ōr* を示している。従って、ここでも *acrostatic* タイプから *amphikinetic* タイプへのアプラウトの変化による派生方法がみられる。

本節では複合語、中性名詞から造られる形容詞そして集合名詞の形成において内派生が大きな役割を果たしていることを概観した。今後の詳細な研究によって、印欧祖語において内派生がより広範に用いられていたことが明らかにされる可能性は十分期待できる。内派生は *s*-アオリストの形成にのみみられる孤立したプロセスでは決してありえない。

3.6. *s*-アオリストの延張階梯は後期印欧祖語の時期に内派生によって導入されたことをうえて述べた。ヒッタイト語とトカラ語はこの内派生が適用される以前の **o~*e* アプラウトを留めている点で古い状態を部分的に保存している。既に観察したように、この両言語が *s*-アオリストの古い段階を保持していることを示唆するもうひとつの言語事実がある。それは *-s-* がヒッタイト語 *hi*-動詞の過去とトカラ語過去第3類において3人称単数のみに生起することである。ここでは *-s-* のこの分布の特異性について、やや広い視点から考察を加えたい。

3.1. で述べたように、印欧語の動詞体系は基本的に2つの系列に大別される。ひとつは 1 sg. **-m*, 2 sg. **-s*, 3 sg. **-t*, 3 pl. **-nt* という語尾によって特徴づけられる *athematic* の系列, もうひとつは 1 sg. **-h₂e*, 2 sg. **-th₂e*, 3 sg. **-e~*o*, 3 pl. **-r* をもつ系列 (仮りに *h₂e*-系列と呼ぶ) である。前者は伝統的な比較文法においても認められていたのに対して, 後者は新しく注目されるようになった系列である。この *h₂e*-系列には完了, 中動態, *thematic* の能動態, *hi*-動詞そして **o~*e* アプラウトを示すトカラ語 *näk-*, *tsäk-* などの動詞が含まれる。*h₂e*-系列動詞の基本語尾は, 重複と語根の **o~*e* のアプラウトによって独自に特徴づけられている完了を除いて, 多くの変容を蒙っている。とりわけ *thematic* の能動態は, ほとんどの印欧語において, *athematic* の能動態語尾の影響を受け本来の語尾を失っている。⁹⁵⁾

sg. 1	<i>*-o-h₂</i>		<i>*-o-m</i>
2	<i>*-e-th₂e</i>	→	<i>*-e-s</i>
3	<i>*-e</i>		<i>*-e-t</i>

また, 中動態語尾も多くの重要な点で二次的な変容を逐げている。⁹⁶⁾ 一方, *hi*-動詞はかなり忠実に本来の語尾を継承している。

h₂e-系列のパラダイム内部では 3 人称単数語尾が至るところで二次的変形を受けている。まず中動態の二次語尾では, *athematic* の能動の影響により **-o* → **-to* (e. g. Skt. *abharata* “he carried for himself”, Gk. *ἐφέπετο* “id.”), または **-o* → **-ot* (e. g. Skt. *aduhat* “he milked”) の変化, 一次語尾では **-o* と二次的に造られた **-to* が *-i* または *-r* によって拡張されている (e. g. Vedic Skt. *saye* “he lies”, classical Skt. *sete* “id.”, Lat. *amatur* “he is loved”)。ヒッタイト語の中動態は二次語尾には *-t(i)*, 一次語尾には *-ri* が付与されている。古期ヒッタイト語の *-ri* のない中動態現在, 例えば *ta*-クラスの *arta* “he stands”, *a*-クラスの *eša* “he sits” はアナトリア祖語では **(t)or* と語末に *-r* を持っていた。⁹⁷⁾ 同様に *thematic* の能動態は, *athematic* の語尾の影響を受け, 一次語尾 **-e* → **-eti* (e. g. Skt. *bharati* “he carries”), 二次語尾 **-e* → **-et* (e. g. Skt. *abharat* “he was carrying”) の変化を蒙った。⁹⁸⁾ *hi*-動詞についても, やはり一次語尾 *-i* は本来の **-e* に小辞 **-i* が付与された **-ei* から二次的にもたらされた。以上の考察から, *-s-* が付与されているヒッタイト語 *hi*-動詞過去とトカラ語過去第3類に限らず, *h₂e*-系列に属するカテゴリーの

3人称単数形語尾が、一次と二次に関係なく、その機能的な位置を明瞭に表示するために形式的な変容を受けていることは、どの言語にもみられる普遍的な事実であることが分かる。この視点に立つと、*hi*-動詞とトカラ語過去第3類において、アオリストの機能をより明示的に示すために本来の3人称単数の形式に *-s-* が加えられたことが無理なく理解される。しかし、ここで問題になるのはこの *-s-* が何に由来するのかということである。この問題は第4章において有機的な立場で論じたい。

3.7. 本章は *s*-アオリストの起源的な状態を保持しているヒッタイト語とトカラ語 A, B を中心に論じた。*s*-アオリストに特徴的な語根の延張階梯は、後期印欧祖語の時期に内派生によってもたらされた。また、ヒッタイト語 *hi*-動詞の過去とトカラ語過去第3類が示すように、*-s-* は能動の3人称単数にまず導入され、後に各分派言語においてパラダイム全体に *-s-* が一般化された。

4. シグマをもつ動詞カテゴリーについてのうえの各章での考察から、次の三つの分析結果が引き出された。

- 1) 印欧祖語の後期において、シグマをもつ未来・願望形には既に多様なタイプの形成法が存在していた。
- 2) 伝統的には *s*-アオリスト直説法から派生されると見做されている *s*-接続法は、共通基語の時期に十分確立したカテゴリーであった。
- 3) *s*-アオリストを特徴づける延張階梯 *-ē-* は、後期印欧祖語の比較的遅い時期に内派生によって導入された。また、ヒッタイト語とトカラ語 A, B の事実から、アオリストの *-s-* の要素は本来3人称単数においてのみ特徴的であった。

s-未来は *s*-アオリストの接続法から導き出されたとする伝統的な見方では、この三つの観察を満足以説明することは全くできない。*s*-未来、*s*-願望法、*s*-接続法及び *s*-アオリストの相互の関連を有機的に把握することは決して容易ではないが、本稿での分析から得られた根拠に基づき、各カテゴリーの歴史的関係を統一的に説明するひとつの可能性を以下において提案する。

伝統的な見方が直面する困難は、そもそもシグマをもつカテゴリーのうち *s*-アオリストが最も古いとアプリアリに考えることから生じた。逆に、*s*-アオリ

ストの誕生が最も新しいと考えるならば、*-s-*による動詞形成の歴史はそれほど無理なく理解することができる。

印欧語の動詞語根が、それ自身の有する意味によって、本来動詞組織中の特定の時称語幹においてのみ用いられたことはよく知られている。つまり、瞬間的な (*punctual*) 意味を持つ語根はアオリスト語幹のみに限られるのに対して、非瞬間的な (*non-punctual*) 意味を持つ語根は現在語幹に限られていた。⁹⁹⁾ このことは、例えば「運ぶ」を意味するラテン語動詞において、現在形は *ferō* (< **bher-*)、完了形は *tulī* (< **tel-*) という別個の語根が *suppletive* に用いられている事実などに散見される。ところが後期印欧祖語の時期になると、名詞派生の動詞 (*denominative*) の発達と相まって、ひとつの語根がすべての時称語幹に用いられる傾向が顕著になった。この傾向は、本来瞬間的なアオリスト語幹と非瞬間的な現在語幹との間の形式的な弁別を、直説法においても、接続法においても、不明瞭にした。語根アオリストを取る動詞の場合、大抵は現在語幹は接辞もしくは重複によってアオリスト語幹と区別されるので、うえの傾向はそれほど重大な形態的曖昧性をもたらさなかった。例えば、ヴェーダにおいては、*kr-* “make” からは現在直説法 *kr̥nóti*, 接続法 *kr̥návat*, アオリスト直接法 *ákar*, 接続法 *kárat(i)* が造られ、*sthā-* “stand” からは現在直説法 *tīṣṭhati*, 接続法 *tīṣṭhat(i)*, アオリスト直接法 *ásthat*, 接続法 *sthát(i)* が造られ、いずれの場合も現在語幹とアオリスト語幹の間の形式的差異は明白である。また *a-*アオリスト (*thematic aorist*) とその下位クラスである重字アオリスト (*reduplicated aorist*) は、G. Cardona の綿密な研究によれば、**uid-* “find” (Gk. ἔψιδε = Ved. Skt. *ávidat* = Arm. *egit*) 以外には印欧祖語から来源する *thematic aorist* は存在せず、他はすべて各分派言語内部での並行的な発展にすぎない。¹⁰⁰⁾ 問題は後に *s-*アオリストを取るようになった動詞の場合である。ここでは、アオリスト語幹と現在語幹の形態的類似が両者の機能的な差異の弁別を困難にしていたに違いない。言語変化においては形式は変わっても必要な弁別は保存されるのが常であるから、瞬間的意味を有するアオリスト接続法を現在接続法と区別するために、意味の類似した *s-*未来・願望形から *-s-* が前者に導入された (**-e/o* → **-se/o-*)。こうして生まれたのが、伝統的に言われるところの *s-*アオリストの接続法である。他方、アオリスト直接法は、現在直説法との混同を避けるために、3.4. で述べた内派生によって **ē*~**e* によって特

徴づけられるようになった¹⁰¹⁾。次に、このアオリスト直説法のパラダイムの中の3人称単数の機能的な位置を明確にするために、*-s-* をアオリスト接続法から導入し (3 sg. **-e* → **-se*)、後に各分派言語の歴史においてこの *-s-* はパラダイム全体に一般化された。以上の論証の一部は既に前章で詳しく述べた。

うえで考察したシグマ形成法の歴史を *melH-* “grind” のパラダイムによって図式的に提示してみよう。印欧祖語には *punctual* な意味を持つ *h₂e*-動詞 (その下位クラスは **o~*e* アプラウトを示す) の直説法と接続法が存在した。

indic. sg.	1 * <i>mólH-h₂e</i>	pl.	1 * <i>mélH-me</i>
	2 * <i>mólH-th₂e</i>		2 * <i>mélH-te</i>
	3 * <i>mólH-e</i>		3 * <i>mélH-ŕ</i>
subj. sg.	1 * <i>mélH-o-h₂e</i>	pl.	1 * <i>mélH-o-me</i>
	2 * <i>mélH-e-th₂e</i>		2 * <i>mélH-e-te</i>
	3 * <i>mélH-e-e</i>		3 * <i>mélH-o-ŕ</i>

このタイプの動詞は本来アオリスト語幹にのみ使用されていたが、次第に現在語幹でも用いられるようになり、両者を区別するためにアオリスト語幹は接続法に機能が類似した *s*-未来・願望法の接辞 **(h₁)s-* の **-s-* を導入した (共通基語で *s*-未来・願望形が確立したカテゴリーであったことは第1章でみた)。

subj. sg.	1 * <i>mélH-s-o-h₂e</i>	pl.	1 * <i>mélH-s-o-me</i>
	2 * <i>mélH-s-e-th₂e</i>		2 * <i>mélH-s-e-te</i>
	3 * <i>mélH-s-e-e</i>		3 * <i>mélH-s-o-ŕ</i>

このパラダイムがいわゆる *s*-アオリストの接続法と伝統的に呼ばれるものの起源である。*s*-接続法は一般に *thematic* と言われるが、これは本来の接続法の接辞 **-e/o-* に **-s-* が前接された必然的な帰結である。うえのパラダイムは、後にほとんどの言語で *athematic* の *mi*-活用の動詞語尾の影響を受けて変容した。

subj. sg.	1 * <i>mélH-so-m</i>	pl.	1 * <i>mélH-so-me</i>
	2 * <i>mélH-se-s</i>		2 * <i>mélH-se-te</i>
	3 * <i>mélH-se-t</i>		3 * <i>mélH-so-nt</i>

一方、アオリスト語幹直説法は、**o~*e* アプラウトから **ē~*e* アプラウトへの内派生によって、現在語幹直説法と弁別されるようになった。

indic. sg.	1 * <i>mélH-h₂e</i>	pl.	1 * <i>mélH-me</i>
------------	--------------------------------	-----	--------------------

2 * <i>mélH-th₂e</i>	2 * <i>mélH-te</i>
3 * <i>mélH-e</i>	3 * <i>mélH-r</i>

うえのアオリストを特徴づける **ē* ~ **e* アプラウトはこのクラスの動詞に限らず、次第に拡がったに違いない。さらに、内派生に加えて、共通基語時代にうえのパラダイムはもうひとつの革新を蒙った。すなわち、-*s*-の3人称単数形への導入である (*h₂e*-動詞の3人称単数の形式上の不明瞭さについては、3.6.で考察した)。既に第2章で示したように、*s*-接続法は分派諸言語で *s*-アオリストに劣らず広く使われていたことから、この -*s*- は *s*-接続法から対応するアオリスト直説法に移されたと考えられる。

indic. sg. 1 * <i>mélH-h₂e</i>	pl. 1 * <i>mélH-me</i>
2 * <i>mélH-th₂e</i>	2 * <i>mélH-te</i>
3 * <i>mélH-se</i>	3 * <i>mélH-r</i>

この語尾の状態は基本的に古期ヒッタイト語とトカラ語 A, B に保持されている。但し、ヒッタイト語ではその先史において *mi*-動詞の過去 3 sg. **-t* の影響で、3 sg. **-se* → **-s* と末尾の母音を脱落した。トカラ語では、共通トカラ語の時期に第3類以外の過去のクラスの影響を受けて **-sāt* となった後、A で -(*ä*)*s*, B で *-sa* と変化した。

ここまでが *s*-アオリスト直説法の共通基語の時期における歴史である。後に各分派言語で、本来3人称単数にのみ固有の -*s*- が語幹末の要素と再解釈され、パラダイム全体に拡がった。語尾に関しては、アオリスト接続法の場合と同様に、*athematic* の *mi*-活用の動詞語尾の影響を大多数の言語が後に受けている。こうして成立したのが、通例古典的 *s*-アオリスト直説法として再構成されているパラダイムである。

indic. sg. 1 * <i>mélH-s-ṃ</i>	pl. 1 * <i>mélH-s-me</i>
2 * <i>mélH-s-s</i>	2 * <i>mélH-s-te</i>
3 * <i>mélH-s-t</i>	3 * <i>mélH-s-ṃt</i>

語根の母音度については、能動においてサンスクリット語、ラテン語、古代教会スラヴ語、それにトカラ語は延張階梯を一般化し、ヒッタイト語は現在語幹に保存されている基本アプラウトを復活させた。また他の諸言語は弱形の階梯を画一化し、延張階梯を失った。伝統的な見方の枠内では *s*-アオリストのパラダイムのなかで逸脱しているように見える Skt. 3 pl. *-uḥ* < **-ur* < **-r* と

Gk. 3 sg. $-σε$ は、本稿で提示した考えによれば、逸脱しているのではなく実際には古い形式を保持していることがわかる。一方、形態的にアオリスト語幹と類似していた現在語幹は、*mi-*活用の動詞語尾の影響と *thematization* を蒙った形で分派諸言語に残っている (e. g. Lat. *molō*, Goth. *malan*, Lith. *malù*, OIr. *melid*, etc.)。

以上のプロセスを経て成立した *s-*アオリストは、その明示的な形式のために、分派諸言語において広く用いられるようになった。歴史的にみて新しく形成された名詞派生の動詞は、とりわけ顕著に *s-*アオリストと結びついている (Gk. *ἐτίμησα* “I honored” (< *τιμή* “honor”), OIr. *-mórus* “I magnified” (< *már, mór*, “great”), etc.)。

(注)

- 1) 本研究の準備段階で、ライデン大学の Frederik Kortlandt 教授とコーネル大学の Jay Jasanoff 教授から有益な助言を得ることができた。ここに謝意を表したい。また、本稿の第1章は、昭和61年10月5日に開かれた第3回印欧学研究会における発表に加筆したものである。
- 2) 語幹が $-e/o-$ で終わるものは thematic 語幹、そうでないものは athematic 語幹と呼ばれる。歴史的には athematic 語幹の方が古く、母音交替を示す。
- 3) W. Krause-W. Thomas, *Tocharisches Elementarbuch* (1960), Heidelberg. における共時的な分類による。A, B 両方言とも接辞 $-s-$ を持つ。
- 4) 詳細に関しては、J. Kuryłowicz, “Les désinences moyennes de l’indo-européen et hittite” *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 33 (1932), Chr. S. Stang, “Perfektum und Medium” *Norsk tidsskrift for sprogvidenskap* 6 (1932), とりわけ、C. Watkins, *Indogermanische Grammatik* III/1 (1969), Heidelberg. を参照されたい。
- 5) 以下において用いる言語名の略を示す。Gk.=Greek (ギリシア語), Lat.=Latin (ラテン語), Osc.=Oscan (オスク語), Umbr.=Umbrian (ウムブリア語), Skt.=Sanskrit (サンスクリット語), Ave.=Avestan (アヴェスタ), OIr.=Old Irish (古期アイルランド語), Goth.=Gothic (ゴート語), Lith.=Lithuanian (リトアニア語), OCS.=Old Church Slavic (古代教会スラヴ語), Arm.=Armenian (アルメニア語), Hitt.=Hittite (ヒッタイト語), Toch. A=Tocharian A (トカラ語 A), Toch. B=Tocharian B (トカラ語 B), (P)IE.=(Proto-)Indo-European (印欧祖語)。
- 6) この種の古くは接続法であったギリシア語の未来形の例については、E. Schwyzer, *Griechische Grammatik*, Bd. I (1939 : 780) を参照。
- 7) 現在形はそれぞれ別の接辞によって拡張されている。*ἐσθίω* は「歯音+歯音 → $σ$ +歯音」というギリシア語の変化を蒙った。
- 8) thematic 動詞の3人称単数現在語尾は、印欧祖語の最も古い段階では $*-e-i$ と再構成され、後に athematic 動詞の影響で $*-e-ti$ となった。ギリシア語の3 sg. $-ει$ は、最も古い状態をそのまま保持していると考えたいが、伝統的な見方に従い、 $-ει < *-eit < *-eti$ (metathesis を蒙る) と考えても、ここでの議論には差し支えない。
- 9) C. D. Buck, *Comparative Grammar of Greek and Latin* (1933 : 291), Chicago. を参照。

- 10) Schwyzer, *op. cit.*, p. 784 及び Buck, *op. cit.*, p. 279.
- 11) H. Rix, *Historische Grammatik der Griechischen* (1976 : 224), Darmstadt.
- 12) ἄλεσα “I destroyed” < *e-h₃elh₁-s-ŋ は, h₁ が母音化した ε を持つ。
- 13) この形式は, πλεύσομαι とともにアッティカ方言に在証される。
- 14) 例えば, ギリシア語のアルカディア・キュプロス方言に保存される 1 人称単数の中動態の二次語尾 -μᾶν (アッティカ方言 -μην) は, 本来の thematic の語尾 -h₂ に athematic の -m が前接され, 子音で終わる語幹のあとで -mh₂ > -mā となり, さらに, athematic の -m (語末で -ν) が付与されたと考えられる。この場合は, 本来の語尾が二度, athematic の -m によって改変された。
- 15) サンスクリット語の語根 ikṣ- は, 元来, 願望法の語幹で, サンスクリット語内部でそれが普通に引用される語根と再解釈された。
- 16) おそらく, 通常引用される語根の長母音 ā (pā-, gā-, hā-) の影響で, i が i になったのであろう。jñā- “know” (IE. *ǵneh₃-) から予想される形が **jijāsati < *ǵi-ǵñh₃-se-ti であるのに, 実際の形が jijñāsati であることから, 語根の形式の影響力が推察される。
- 17) 音韻法則に従うと, **ctciṣati が予期される形であるが, おそらく cit- “perceive” (IE. *kweit-) の完了の形 ciketa (3 sg.) < *kvi-kvoit-e などの類推から, 語根部の口蓋化を失い cikīṣati となったのであろう。また, han- “slay” (IE. *ǵʰen-) の願望形は jighāmsati であるが, これも予想される形 **jighāsati < *ǵʰihǵʰh₃seti < *ǵʰhi-ǵʰh₃-Hse/o- が類推によって鼻音を獲得したと考えられる。
- 18) データは H. Reichelt, *Awestisches Elementarbuch* (1909 : 107), Heidelberg. に基づく。尚, didarəza- の z は, 古代教会スラヴ語における ruki rule と類似した規則と Bartholomae’s Law によって, ḡhs → zhs → zzh → z のように変化したと推定できる。
- 19) f-未来の起源は, C. Watkins “The Origin of the f-future” *Ériu* 20 (1966) や E. G. Quin, “The Origin of the f-future: An Alternative Explanation” *Ériu* 29 (1978) などの論考があるが, 未だ解決されていない問題である。
- 20) ここで示したのは連結形 (conjunct form) のパラダイムである。古期アイルランド語の動詞体系は, 独立して用いられる絶対形 (absolute form) と前接辞類が付与される連結形という二つの形式によって支配される。伝統的には, これらの二つの形式はそれぞれ印欧語の一次語尾 (現在に言及する) と二次語尾 (過去に言及する) に遡るとされている。cf. R. Thurneysen, *A Grammar of Old Irish* (1975 : 360), Dublin., C. Watkins, “Preliminaries to a Historical and Comparative Analysis of the Syntax of the Old Irish Verb” *Celtica* 6 (1963), W. Meid, *Die indogermanischen Grundlagen der altirischen absoluten und konjunkten Verbalflexion* (1963), Wiesbaden.

絶対形 berid “bears” < *bhereti (一次)

連結形 do-beir “brings” < *bheret (二次)

しかし, 本来, 現在と過去を弁別するために用いられた語尾が, 何故両者とも古期アイルランド語で現在形に使われるようになったのか, この機能的な隔りが問題として残る。Watkins, *op. cit.* は, この問題を克服するために, 本来一次と二次語尾の区別は重要ではなく, ヴェーダにのみよくみられる指令法 (injunctive, augment のない過去形) を最も古い印欧語のカテゴリーとして提案する (ヴェーダにおける指令法の用法については, K. Hoffmann の大家の名にふさわしい, しかし純然たる共時的研究 *Der injunktiv im Veda* (1967), Heidelberg. に詳しい)。指令法が印欧祖語に遡るかどうかにについては, 学者の意見はかなり異なるが, 個人的には, ヴェーダにおいてのみ生産的な動詞範疇を古期アイルランド語の絶対形と連結形の起源の説明に利用することに躊躇を感じざるを得ない。

この伝統的な見方よりもはるかに魅力的な説が、W. Cowgill, “The Origin of the Insular Celtic Conjunct and Absolute Verbal Endings” *Flexion und Wortbildung* (1975), Wiesbaden. によって提出された。この説によると、絶対形も連結形もともに一次語尾から来源するが、絶対形には小辞 *-(e)s* が付与される。絶対形 *berid* と連結形 *-beir* は、この枠組では、語末の *-i* の脱落 (*i*-apocope) と語末音節の脱落 (final syllable reduction) によって、次のように説明される。

berid < **bhereti-s*
-beir < **bheret* < **-bhereti*

本稿では、Cowgill の説を受け入れるが、たとえ伝統的な立場に立っても、ここでの議論の展開は影響を受けない。

- 21) Thurneysen, *op. cit.*, p. 67.
- 22) 共通基語においては、動詞語根の有する固有の意味によって、各時称語幹が別個の語根から造られることがある (suppletion)。例えば、ギリシア語現在 *φέρω* “I bear”, ラテン語現在 *ferō* “id.” に対するギリシア語アオリスト *ἔφερα*, ラテン語完了 *tuli* などにみられる。
- 23) *-béra* “he will bear”, *-méra* “he will betray” などの *ē*-未来形の *ē* は代償延張によって生じたとは考えられないため、二次的に造られたものと推定できる。
- 24) F. Kortlandt は, “Old Irish Subjunctives and Futures and their Proto-Indo-European Origins” *Ériu* 35 (1984) で、本稿での見方と根本的に異なる解釈を提出している。筆者の判断では、Kortlandt が主張するような全く革新的な説が一般に受け入れられるためには、それを支持する諸言語からの根拠は、あまりにも乏しい。
- 25) 古期アイルランド語の重複をもつ *s*-未来の deponent に *-gignethar* “he will be born” という興味深い形式がある。この語根は IE. **ǵenh₁-* で、初頭に *ǵ*, 末尾に *h₁* を持つため、もし語根が零階梯であれば、*ē*-未来が形成されるはずである。従って、*-gignethar* は *e*-階梯の **ǵi-ǵenh₁-se-tor* から第二音節の syncope によって造られたと考えなければいけない。そうすれば、この形式はサンスクリット語の願望形 *jijaniṣate* (サンスクリット語は **-tor* ではなく **-toi* > *-te* をとる) と正確に対応する。重複を別にすれば、これは既にみたギリシア語の *s*-未来と同じ形成法である。このサンスクリット語と古期アイルランド語の対応を重視するなら、古期アイルランド語の deponent は本来 *e*-階梯で、能動態の零階梯が後に一般化されたと見做すことも可能である。
- 26) A. A. MacDonell, *Vedic Grammar* (1910), Strassburg. p. 386.
- 27) cf. A. Meillet, *Le slave commun* (1934), Paris. p. 201.
- 28) Skt. *bhaviṣyánt-* は新しく造られた未来分詞の形と見做される。
- 29) Chr. S. Stang, *Vergleichende Grammatik der baltischen Sprachen* (1966), Oslo. p. 398.
- 30) 一人称単数の *dúosiu* だけは、**-mi* → **-ō* の thematization を蒙っている。
- 31) cf. Chr. S. Stang, *op. cit.*, p. 398 や A. Meillet, *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes* (1964), Alabama. p. 214 など。
- 32) J. Jasanoff, *Stative and Middle in Indo-European* (1978), Innsbruck. p. 106.
- 33) リトアニア語では、*iR*, *uR* に鋭アクセントが落ちる場合、*ɪR*, *ʊR* ではなく、*ɪ̃R*, *ʊ̃R* と表記される。
- 34) C. D. Buck, *A Grammar of Oscan and Umbrian* (1904), Boston. p. 169.
- 35) この形は重複を持つので、起源的には比較的新しいと思える。また、次の *heriest* 以下の四つの形も、**-ie/o-* をもつ現在語幹に *s* が付与されている点で、古いとはいえない。
- 36) 3人称複数の能動態は、*-sont* が *-sent* に取って代わられたあと、*-s-* が母音間で rhotacism を蒙っている。

Umbr. *-rent* < **-sent* < **-sont*

Osc. *-zet* < **-sent* < **-sont*

イタリック語派のうち、ウムブリア語とラテン語は $s \rightarrow z \rightarrow r$ の rhotacism を経た。この点でオスク語はより古い段階を保持している ($z \rightarrow r$ が起こっていない)。3人称複数の受動態 Umbr. *-sendi* は **-senter* に遡る。

- 37) 3人称複数の Umbr. *-rent*, *-sendi*, Osc. *-zet* に関しても, Buck は thematic の **-se-nt(er)* に遡ると見做しているが, athematic の **-s-ent(er)*, もしくは **-s-nt(er)* と考えて何ら差し支えはない。
- 38) cf. A. Ernout, *Morphologie historique du latin* (1953), Paris. p.162ff.
- 39) 古典期では, **-ie/o-* によって拡張される形に, 接続法のマーカー **-e/o-* を付与することによって未来形が造られる (**dhh₁k-ie/o-e/o-* > 1 sg. *faciam*, 2 sg. *faciēs*, 3 sg. *faciet*)。
- 40) 印欧祖語の希求法の接辞 **-ieh₁-*/**-ih₁-* はラテン語の *sum* “I am” の接続法現在にも残っている。初期ラテン語では, 単数形は **-ieh₁-*, 複数形は **-ih₁-* によってマークされている。

sg. 1 *siem* < **s-ieh₁-m*

2 *siēs* < **s-ieh₁-s*

3 *siet* < **s-ieh₁-t*

pl. 1 *simus* < **s-ih₁-mos*

2 *sitis* < **s-ih₁-tes*

3 *sint* < **s-ih₁-nt*

ところが, 古典ラテン語では弱形 *-i-* を一般化している (1 sg. *sim*, 2 sg. *sis*, 3 sg. *sit*, 1 pl. *simus*, 2 pl. *sitis*, 3 pl. *sint*)。これに対して, ギリシア語, サンスクリット語の希求法では, 強形 **-ieh₁-* を一般化している (Gk. 1 sg. *εἶην* < **es-ieh₁-m*, 2 sg. *εἶης*, 3 sg. *εἶη*, 1 pl. *εἶημεν*, 2 pl. *εἶητε*, 3 pl. *εἶησαν*, Skt. 1 sg. *syām* < **s-ieh₁-m*, 2 sg. *syāh*, 3 sg. *syāt*, 1 pl. *syāma*, 2 pl. *syāta*, 3 pl. *syuh*. < **syānt*)。

- 41) R. Thurneysen, *op. cit.*, p. 410ff.
- 42) H. Reichert (*op. cit.*, p. 328) が, アヴェスタの s-アオリストの多くの分詞は未来の意味を持つと指摘しているのは, この点で示唆的である。
- 43) Skt. *-uh* (< **-ur*) はヒッタイト語 *hi-*動詞の過去3人称複数 *-er(-ir)* に比定できる。語根アオリストのうち *-ā* で語根が終わるもの(約8つ)も, 3 pl. *-uh* をとる。これらの多くがヒッタイト語 *hi-*動詞に対応形を持つことは興味深い。(e. g. Skt. *āduh* “they gave” : Hitt. *dāir*, Skt. *ādhuḥ* “they put” : Hitt. *daiēr*)。尚, *dā-* “give”, *dhā-* “put” などは s-アオリストもとる(特に接続法に多い)。また, 未完了(imperfect)でも, *-uh* をとる動詞がある。
- 44) J. Narten, “Zum “proterodynamischen” Wurzelpresens” *Pratidānam : Indian, Iranian and Indo-European Studies presented to F. B. J. Kuiper* (1968), The Hague. p. 9ff.
- 45) シグマのアオリストを形成する語根が, その形成法において Veda 内部でどのような歴史を辿ったかについては, J. Narten の詳細な研究 *Die sigmatischen Aoriste im Veda* (1964), Wiesbaden. の p. 83 ff. をみられたい。
- 46) 1人称複数の *-sāma* の長い *ā* (< IE. **o*) は Brugmann の法則「印欧祖語の **o* はソナントの前の開音節にある場合, インド・イラン語派で **ā* になる」に従う。
- 47) 語根アオリストの希求法が共通祖語で確立したカテゴリーであったことに関しては, K. Hoffmann, “Zum Optativ des indogermanischen Wurzeläorists” *Pratidānam*, p. 1 ff. を参照。
- 48) G. Cardona, “The Vedic Imperative in *-si*” *Language* 41 (1965)。
- 49) O. Szemerényi, “The Origin of the Vedic ‘Imperatives’ in *-si*” *Language* 42 (1966)。

- 50) G. Cardona, *On Haplology in Indo-European* (1968), Philadelphia.
- 51) C. D. Buck, *Comparative Grammar of Greek and Latin* (1933 : 245), H. Rix, *Historische Grammatik des Griechischen* (1976 : 243) など。
- 52) ホメーロスの短母音接続法の例は, P. Chantraine, *Grammaire homérique I* (1948), Paris. の 454頁以下に豊富に挙げられている。
- 53) Thurneysen, *op. cit.* p. 422。
- 54) C. Watkins, *Indo-European Origins of the Celtic Verb*, I. *The Sigmatic Aorist* (1962), Dublin. 及び “The Origin of the *t*-Preterite” *Ériu* 19 (1962) を参照。
- 55) 古期アイルランド語におけるこの変化は, *tart* “*thirst*” < **tarsto-* < **tysto-* (cf. 古高地ドイツ語 *durst*, 英語 *thirst*) などにみられる。
- 56) Watkins, *IE Origins of the Celtic Verb*, p. 123 ff.。
- 57) H. Rix, “Das keltische Verbalsystem auf dem Hintergrund des indo-iranisch-griechischen Rekonstruktionsmodells” *Indogermanisch und Keltisch* (1977), Wiesbaden., p. 152.
- 58) Watkins, *Ériu* 19, p. 29 の注(2)をみられたい。
- 59) Thurneysen, *op. cit.*, p. 109.
- 60) 既に1. 2. で扱った *ā*-未来の場合とは違って, 何故 *-té* が古い時期に *athematization* を蒙らなかったかは問題として残される。
- 61) Thurneysen, *op. cit.*, p. 374ff.。
- 62) この考えは J. Jasanoff の示唆に基づく。
- 63) ここでは扱えなかった重要な問題は *s*-接続法と *ā*-接続法の関係である。Watkins は, 本論で触れたように, *ā*-接続法をアプリアリに希求法に遡ると考えている。Rix (*op. cit.*, p. 151ff.) は, 喉音で終わる語根の *s*-接続法が広がったと主張するが, 1. 1. で述べたアッティカ式未来についての彼の考えと同様の困難にぶつかる。A. Bammesberger は (“The Origin of the *ā*-Subjunctive in Irish” *Ériu* 23 (1982)), Italo-Celtic に特有の *ā*-接続法を *ā*-アオリストの短母音接続法と解釈しているが (**-ā-e/o-* > **-ā-*), 検証の余地がある。また, 1. 2. における *ā*-未来の分析と並行的に, ソナントで終わる語根に **-h₁se/o-* が付与されたと考えるのは魅力的であるが, サンスクリット語やギリシア語の *s*-接続法には *h₁* が存在したことを示す証拠はない。この問題については別の機会に論じたい。
- 64) O. Szemerényi, *Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft* (1970, Darmstadt) も 265 頁以下において, 3つのタイプの未来形のうち *s*-未来は *s*-アオリストの接続法から来源したと見做し, 伝統的な説を受け入れている。
- 65) 中動態においては, 標準的な文法書, 例えば J. Friedrich, *Hethitisches Elementarbuch I* (1960), Heidelberg. の 77頁や H. Kronasser, *Vergleichende Laut- und Formenlehre des Hethitischen* (1956), Heidelberg. の 203頁に示されているような *mi*-動詞と *hi*-動詞の区別は存在しない。ヒッタイト語の中動態の語尾及びその印欧語起源については, 筆者のコーネル大学博士論文 *The Hittite Mediopassive Endings in -ri*. (1986) を参照されたい。
- 66) *hi*-動詞が印欧語の完了形から多くの二次的変形を蒙って成立したのではないかという見方が, これまで数人の学者によって提唱されている (例えば, E. Eichner, “Die Vorgeschichte des hethitischen Verbalsystems”, E. Risch, “Zur Entstehung des hethitischen Verbalparadigmas”.) ともに *Flexion und Wortbildung* (1975), Wiesbaden. に所載。)。しかし, 両者の類似は語尾の形式のみで, 語彙の分布と機能における両者間の顕著な隔りに関しては, この見方は全く説得力を欠く。逆に, *hi*-動詞は形態的にも機能的にも印欧祖語に存在したカテゴリーを直接伝承しているのではないかというより有力に思われる説が J. Jasanoff によって提案されている (“The

- Position of the *hi*-Conjugation” *Hethitisch und Indogermanisch* (1979), Innsbruck.)。
- 67) 最近のヒッタイト文献学の目ざましい進歩を踏まえた、真の意味のヒッタイト歴史文法の構築を目差す研究はようやく始まったばかりで、将来ヒッタイト語の文法は根本的に書き改められなければならない。この問題については拙稿「ヒッタイト研究の新段階」『西南アジア研究』25 (1986) を見られたい。
- 68) E. Benveniste, *Hittite et indo-européen* (1962), Paris. p. 18f.
- 69) *-nun* の成立のプロセスは、注14)で述べたギリシア語の1人称語尾 *-mān* と類似している。
- 70) ラテン語の3人称複数の完了語尾のうち、*-ēre* の方が古く、*-ērunt* は athematic の能動の語尾の影響を受けている。*-ēre* は Eichner, *op. cit.* p. 87 や N. Oettinger, *Die Stammbildung des hethitischen Verbums* (1979), Nürnberg. p. 114 の見方とは異なり、単数形と並行的に (1 sg. *-ī* < **-ai* < **-h₂e+i*, 2 sg. *-isti* < **-[is]tai* < **-th₂e+i*, 3 sg. *-it* < **-ei[t]* < **-e+i*), **-ēr+i* に遡ると考えられる。
- 71) この点に関しては、拙稿 “Problems in the Mediopassive Endings of Indo-European” 『言語研究』, 72頁をみられたい。
- 72) 印欧語動詞体系のこのような新しい捉え方は、Kuryłowicz, “Les désinences moyennes de l’indo-européen et du hittite” *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 33 (1932) や Stang, “Perfektum und Medium” *Norsk tidsskrift for sprogvidenskap* 6 (1932) に遡り、Watkins, *Indogermanische Grammatik* III/1 (1969), Heidelberg. に最も明確に提示されている。筆者自身の考えの一部は上述の『言語研究』88の拙稿にあらわれているが、京都大学言語学懇話会第6回例会(1984年12月8日)及び大阪言語研究会第81回例会(1986年7月13日)にてより詳しく述べた。
- 73) C. H. Melchert, *Studies in Hittite Historical Phonology* (1984), Göttingen. の67頁を参照。Eichner, “Die Etymologie von heth. *mehur*” *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 31 (1973) の76頁で提案されている **-ei* → *Hitt. -i* という変化は正当ではない。
- 74) この点で、トカラ語の過去第3類において両方言とも1人称単数が A *-wa*, B *-wā* のように *w* を持つのは興味深い。トカラ語過去第3類と *hi*-動詞の過去との関係は後で考察する。
- 75) C. Watkins, *Indo-European Origins of the Celtic Verb* の74頁以下。
- 76) J. Friedrich, *Hethitisches Wörterbuch* (1952), Heidelberg. では、*arāi-* は *mi*-動詞として扱われているが、本来は *hi*-動詞であった。詳しくは、J. Jasanoff, “Hittite *arāi-* and Armenian *y-areay*” *Indo-European Studies* IV (Department of Linguistics, Harvard University) を参照されたい。
- 77) *ijannāi-* も Friedrich, *op. cit.* は *mi*-動詞と考えている。
- 78) ヒッタイト語の過去2人称と3人称の語尾に関して、A. S. C. Ross and R. A. Crossland, “Supposed Use of the 2nd Singular for the 3rd Singular in “Tocharian A”, Anglo-Saxon, Norse and Hittite” *Archivum Linguisticum* 6 (1954) 及び K. Shields, Jr., “On Indo-European Sigmatic Verbal Formations” *Bono Homini Donum, Essays in Historical Linguistics in Memory of J. A. Kerns* (1981), Amsterdam. は、類型論的及び一般言語学的な立場から非常に思弁に満ちた議論を展開している。しかしながら、文献学的な研究を抜きにして言語の先史を無限に再構成することは我々に許されていない。
- 79) F. O. Lindeman, “Bemerkungen zu dem tocharischen s-Präteritum” *Die Sprache* 18 (1972 : 45f.)。
- 80) トカラ語の史的音韻論はまだ不明な点が少ないが、近年かなり研究の進展が見られる。例えば、J. H. W. Penny, “The Treatment of Indo-European Vowels in Tocharian” *Transactions*

- of the *Philological Society* 1976-7 (1978) 等。母音変化の簡単なスケッチは『言語研究』88 (1985) の拙稿79頁以下にも述べてある。
- 81) C. Watkins, *Indo-European Origins of the Celtic Verb* の18頁以下。
 - 82) cf. J. Kuryłowicz, *L'apophonie en indo-européen* (1956), Breslau.
 - 83) *r/n*-語幹の名詞の母音交替については, J. Schindler, "L'apophonie des thèmes indo-européens en *-r/n*" *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 70 (1975) をみられたい。
 - 84) E. Benveniste, *Origins de la formation des noms en indo-européen* (1935), Paris. の第9章。
 - 85) このクラスは中動の形式しか記録されていないので, 能動の形式の語幹の母音度は不明である。
 - 86) cf. J. Schindler, "L'apophonie des noms-racines indo-européens" *BSL* 67 (1972)。
 - 87) J. Jasanoff, "The Position of the *hi*-Conjugation" *Hethitisch und Indogermanisch* (1979), Innsbruck. p. 79ff.
 - 88) もちろん, すべての *hi*-動詞が **o*~**e* アプラウトのクラスに遡ると主張する意図はない。
 - 89) A. Meillet, *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, 183頁。
 - 90) 強格と弱格の代表として, 各々単数主格と単数属格を以下であげる。
 - 91) 何故 *o*-階梯を強格に, *e*-階梯を弱格に割り当てるかについては, 例えばヒッタイト語の「水」を意味する語の単数主格 *uatar*, 単数属格 *uītenaš* (この語は後で述べる acrostatic タイプの(a)に属する) が強格の *o*-階梯と弱格の *e*-階梯を反映している事実と並行的に考えたいからである。
 - 92) 以下の各アプラウトの名称については, Eichner, "Die Etymologie von heth. *mehur*" *MSS* 31 (1973), Schindler, "Zum Ablaut der neutralen *s*-Stämme des Indogermanischen" *Flexion und Wortbildung* (1975), Jasanoff, "The Nominative Singular of *n*-Stems in Germanic" *Papers in Honor of M. S. Beeler* (1980), The Hague. を参照されたい。
 - 93) W. D. Whitney, *Sanskrit Grammar* (1889), Cambridge. 156頁。
 - 94) thematic 語幹では **-e-h₂* > **-ā*, 子音語幹では **-C-h₂* > **-Cə*。
 - 95) ここで示す図式は, Watkins, *Indogermanische Grammatik* III/1 でなされた提案を修正したものである。
 - 96) 詳しくは, 拙稿 "Problems in the Mediopassive Endings of Indo-European" 『言語研究』88 (1985) をみられたい。
 - 97) アナトリア祖語で語末の *-r* がアクセントを有さない音節の後で脱落したことについては, 拙稿 "On the Prehistory of Word-final *-r* in Anatolian" 『言語研究』91 (1987) に詳しい。
 - 98) 唯一の例外は, ギリシア語の thematic の能動態一次語尾 *-σι*, 二次語尾 *-ε* で, これらは印欧祖語に直接遡ると考えられる。
 - 99) ここでいう「意味」とは, 動詞自体に内在する固有の意味特徴である Aktionsart と理解されたい。Aktionsart と Aspect の区別は, 拙稿「ゴート語 preverb *ga-* の研究」『言語研究』78 (1980:85) に倣った。
 - 100) G. Cardona, *The Indo-European Thematic Aorists*. Ph. D. dissertation, Yale University (1960)。
 - 101) J. Jasanoff は1982年6月にイェール大学で開かれた East Coast Indo-European Conference において, *s*-アオリストの延張階梯は Narten タイプの動詞に基づいて類推によってまず3人称単数にもたらされたという趣旨の発言をしている。つまり, subj. **(h₁)éd-e/o-* : indic. **(h₁)éd-t* = subj. **uég^hh-se/o-* : X, X = **uég^hh-st*。しかしながら, 既に3.1. でみたように, ヒッタイトの事実は *-š* → *-st* と語尾が変化したことを示すために, Jasanoff の考える **uég^hh-st* が最も古いシグマのアオリスト形式ではあり得ない。逆に, 第3章で注目した言語事実は, *s*-アオリストの延張階梯は類推ではなく, 派生によって導入された可能性を強く示唆する。